

三六〇

信仰とを入れ置き、己れの時宜に應じてそを一々取り出して使用するものなりと云へり、實に吾人は我が知らざることを信仰するを得ざるが如く、信ぜざることを識知し得可からず、畢竟智識信仰の兩者は互に相調和融合して、此に初めて確實なる智識をも得可く、熱誠なる信仰をも生ず可きなり、然れば智性感情を兩分して吾人の智識上信憑し難きことをも強いて感情に訴へて信仰し得らるゝが如く考ふる不可思議論(Agnosticism)や超理性的(Dervernünftig)信仰を主張するゾンス、スコッス等の如きは、その意宗教を科學的智識の攻撃より擁護せんとするに在るも、その實宗教に災ひするものと謂はざる可からず、ジュスイット教徒の道德の蓋然主義に了らざれば幸甚なり。然れど彼等の思想は矢張り成立宗教の信仰そのもの、後代の哲學上の智識とを調和せんと企つる媒介神學者風の動機に出でし所のものなるが故に、斯かる畸形的不健全の調和説をも生ずるに至りたるものなれ、若し夫れ成立宗教が今日の智識に照らして非眞理たらば、遠慮會釋無く之れを破壊し、その迷信を根絶して、健全なる宗教的信念を以て之れに更ふ可しと爲せる、哲學即ち宗教なりとの立脚地を以てせば、斯かる竹に木を接ぎし

如き、智識と信仰科學と宗教との調和ならざる調和を計るの必要も無く、彼の懷疑論や唯名論を惹き起こすの危険も無きものとす、然れば哲學即ち宗教なりとの立脚地を以てせば、智識と信仰との調和は之れを圖らざるに獨り自ら來るものにして、斯くして初めて彼の永く互に相争ひし、智識信仰の争鬭は靜謐なる調停和解を見るに至る可きものとす、果して然らば今日世人の荐りに稱ふるが如き智識以上に信仰の範圍を附與せんとするが如きは、到底維持す可からざるの謬見なると同時に、智識信仰の兩者は共に日進月歩の性質を具有しをるものなれば、此兩者間の調停和合を計るも、その調停和合たる實に其昨は今を保す可からざる極はめて暫有的の性質を有するものなるが故に、そは畢竟無用の徒勞なりと速斷せる所論の穩當ならざるを知る可きなり。

第四章 成立宗教を論ず

第一節 成立宗教は哲學に由りて辯護

するを得ず

若し宗教にしてその内容は哲學と異ならずと云はゞ、人或は難じて言ん、曰く哲學なるものは元來子が謂へるが如く經驗的に科學の礎上に立ち、而かも彼れ科學なるものは日に月に駸々として進歩し行く所のものなれば、斯かる科學の礎上に立てる哲學は又變化改新を免れず、既に哲學學說にして變化改造を免れざるものとせば、斯かる哲學思想は焉んぞ能く宗教たるを得んや、何んぞなれば宗教は吾人をして安心立命せしむるに足るものたるの天職を擔へるに、是等日々變動し行く所の哲學を以てしては到底究竟的の安心立命は之れを期待し得可からざるを以てなり、然れば宗教は哲學以外別に何等か他に確固不動の基礎を有せざる可からずと。然れど吾人を以て之れを見るに論者の言大に非なり、論者の思想は既に根本的誤謬に陥りたるもの、換言すれば論者は宗教なるものを以て万世一貫寸毫も變遷進化するものに非ずと爲し、宗教は當初より充全なる真理を保持しをると見做すの獨斷的認定を爲せるものなり、然れど斯くの如きは畢竟從來の宗教家が思惟せる如く、宗教は全智全能の神の啓示に由るものなれば、一も不完全なる分子あると無く、一切の真理は既定的に神に由りて其宗

教中に開説せられざるもの、然れば徒らに不完全にして變化窮はまり無き人智に本づきて考定せられたる哲學を以て安心立命の具に供せんとするが如きは至愚の極にして、人間は斯かる智的浮誇心に驅られて日々夜々に痛苦煩悶せんよりは、速かに神が吾人に啓示せる既定的大真理の顯説たる天啓的宗教を信じて安心立命するに如かずと云へる所論に異ならず。唯然果して斯くの如き天啓的宗教は成立し得可きものなるか、吾人は又如何にして其然る所以を知るを得るかとの問題に向ひては、彼等論者は何等科學的の解答をも附與すると無く唯漫然として獨斷的に我は斯く信仰しをるが故にと答へ、若くは僅かにそは吾人の心に直覺する所なりと答ふるが如き、非科學的解答を爲すに止まるのみ、而てこの一派の論者は多くは吾人の斯かる宗教の信仰を得來る原因は之れを神の啓示に歸すと雖も、果たして斯かる神の實在に就いては何等の客觀的効驗性 (Objective Gültigkeit) をも有すと認むべき解答を與ふるもの無く、唯獨斷的に當初より斯かる神の實在を假定するか、若くは又斯かる知識は吾人の直覺に出づと爲すに過ぎず、果して然らば吾人は斯かる直覺は如何にして之れを有するかと

三六四

反問せば又之れを神の啓示なりと答へ、畢竟循環論法(Circulus in probando)の謬りに陥るれる答辯たるに外かならず、若し又その循環論たるの批難を免れんとせば、吾人が斯かる神の存在に關する直覺を有するを了知するは、則ち是れ吾人の知識に外かならずと爲さざる可からず、然れども論者の如く吾人の知識に信用を措かずして、斯かる人間の知識に依頼せんよりは寧ろ神に歸托するに如かずと爲せるものに在りては、斯かる人智に由りて論證せられたる神に關する吾人の直覺的知識に就いても、又之を正確不動のものなりと謂ふを得可からず、然るに論者の如く斯かる直覺は眞に確固不動万世不變のものなりと説くが如きは、自家撞着の甚しきものとす、何んとなれば斯かる直覺の確實を證明するは依然吾人の知識にして、その知識は論者の立脚地よりすれば到底吾人が信用するに足る可き確實のものに非ず、そは實に日々夜々に變轉改化する所のものなればなり、斯くの如く獨斷的に吾人の智識を信用せずして、一向知識なるものが發達進化して寸時も休息すると無き變化的の性質のものなれば、斯かる變遷窮はまり無きの智識は吾人之を信ずるに足らずとなし、而て確實不動の眞理を想定し

て之れを神に歸し、之れを以て確立不變の大眞理を獲得したるものゝ如く思惟すと雖も、而かも斯かる神の想定は畢竟論者自身の信用せずてふ人類の智識に基きるとに想ひ到らざるものにして、斯くの如きは自家撞着の最も甚しきものと謂はざる可からざるなり、若し又斯かる自家撞着を避けんとせば、嚮者に既に指摘せるが如く神の實在を了知すると吾人の直覺に歸し、而かもその直覺の正確眞實なる所以は又之れを神に歸する循環論の過偽に陥るるを免れず、然れば斯かる宗教上の獨斷論や宗教的不可思議論やの、到底維持す可からざるは哲學上の懷疑論獨斷論不可思議論と毫も異なる所無きものにして、若し強いて之れを主張せば、吠檀多派の無宇宙論や絶對的幻妄論に陥るり、全然自家撞着を惹起し、己れの刀劍を以て己れの首を斬りて自殺するの愚に陥るるに至らん、果して然らば吾人の批評的認識論の立脚地に立ちて一方には吾人の認識なるものを科學的に研究して、吾人の智識の絶對的不信用のものに非らざる所以を明晰にし、而かも他方に於ては吾人の經驗は日に増大するものなるが故に、吾人の智識亦其範圍を増大せざる可からざる所以を承認し、斯かる進歩的智識の各階

段に於て其究竟せる合理的智識の能く吾人精神のを満足するに足るものを稱して之れを哲學となし、斯かる哲學々説は則ち其人の宗教なりと爲せるの最も健全なる哲學宗教の解釋たるの勝されるに如かず、今斯くの如く健全なる認識論の下に立ちて確固不動なる立脚地を宗教に附與するを得んか、是れ彼の守舊的宗教家が宗教の神聖を保持せんと欲して、却りて之れを哲學科學の難詰攻撃の餌食たらしめ、其極宗教をして自殺せしむるの悲運を免れざるに至らしむるが如きものと同日の比に非るものなり、然れば宗教を以て濫りに完全なるもの、如く想像し、人智と全然その類を殊にせる智識なるが如く思惟し、人智は無能なるものなれば、眞の安心立命は實に宗教の不變不動の天啓的直覺に基いせずんば到底得可からざるものなりと爲すは、科學的には何等の根底基礎をも有せざる獨斷論にして、畢竟自家撞着に失墜せずんば幸甚なりとす、之れに反して宗教も哲學と同じく發達進化するの智識なりと解し、宗教も日夜に進歩し行く所の人文發達史上の一現象なれば、神造鬼作人智と異なりたる一種の靈妙不可思議の産物にして、人智と全然その類を殊にせるものなりと説くの不合理的なるを承

認するとき、健全なる認識論上の基礎に宗教を説定樹立せしめ得可く、而かも斯かる宗教は其時代々々に於ける究竟的智識證信なるが故に、能く吾人に安心立命の礎を與ふるに足る所のものとなるなり、然り而て余は斯く人智は理論上には日に月に進歩すと説くと雖も、コペルニクス、ニュートン、ダーフィン等の如き天地を轉倒し上下を變換するが如き實驗科學の上に大發明をなす者の如きは實に千歳の一遇にして、千百歳にして一たび出づるもの、若し夫れ他の科學上の諸學説の小變動の如きは日々人智の進歩と共に變化し行くと雖も、吾人哲學思想の体系に向て刷新改造を與ふるが如き大變更は數世紀間を経過して初めて一度開展發達し來たるの産物なれば、實際上には當時彼の經驗科學の上に樹立せる蓋然的智識たる哲學思想の結果も、自家一代間の如き小時期に於てはその時代思想の究竟せるものとして、吾人に充分なる安心立命の礎を與ふるを得可きものとす、果して然らば經驗科學の礎上に説定せられたる哲學たる宗教其ものも、實際的には克く安心立命の良具たるを得可きものとす、然らば昔時人智の進みをらざりし時代は姑く措き、輒近に至りて科學哲學の研究日に旺んなるに於て

は健全なる宗教は健全なる哲學と一致したる所のものならざる可からざるなり、然れば宗教を以て哲學と一致せしむるの從來少なからざる危禍を成立宗教 (Positive Religion) に興へたるを見て斯る危禍に罹れたる宗教家は再び之れが覆徹を襲踏せんことを懼れ、或は宗教を以て全然哲學より分離して道德若くは秘的感情の保護の下に一任せんと欲すと雖も、是れ宗教の本色を忘却したるの致す所にして、主として成立宗教を辯護せんが爲めの底意に出で、斯くの如きに畢竟彼のハートマンが其著精神の宗教第十四頁に於て、錯綜せる雜多の新精神を古形態に包みて舊信仰を保全擁護せんとす (Vermittelungstheologie gewährt für die Zerstörung und Auflösung des alten religiösen Princips wirklichen Ersatz durch ein neues höheres religiöses Princip, dessen Neuheit und Heterogenität durch eine Kleidung in altherbrachte Formen möglichst verhüllt wird.) と云へる媒介神學者流に在りては、亦避く可からざる適切の手段方便なりしならん、然れど吾人の新精神を満足せしむるに足る可き哲學宗教は斯かる皮想的姑息の方法手段にて能く説定せられ得可きものに非らず、而かも斯かる哲學宗教の調和は哲學即ち宗教なりとの立脚地に在りては寸毫

も用無きものとす、然れば健全なる宗教は健全なる哲學なりと知る可く、之れと同時に吾人は彼の成立宗教なるものが到底今日に於ては最早や哲學の武器を藉り來りて辯護し得可きものに非ざるとを斷念せざる可からざるものとす。

第二節 學者の哲學思想は果して民間の信仰と成り得べきか

次ぎに起る可き問題は、其時代々々に於ける智識の究竟せる哲學は、その當時に於て早く既に彼の智識劣等なる民間の信仰と成り得可きかとの疑問是れなり。今哲學即ち宗教なりとの立脚地を以てせば、學者と人民とはハートマンも既にその著宗教哲學に於て述べたるが如く、少くともその智識に二三百年の懸隔ありて存するものなれば、先覺者たり哲學者たる當世の木鐸となる可き人々の思想は、之れを宗教として一般人民に布宣弘通せんとするには頗る困難なるものあり、所謂大言は里耳に入らず、聽く者は如響如啞にして、華嚴の會坐の如き現象を呈出し、畢竟這種の哲學思想は高遠は則ち高遠なり、玄妙は則ち玄妙なりと雖も、俗間の信仰としては到底宗教的効果を全うすると能はざる可し、是れ釋迦が

宗 教 新 論

其弟子輩の深遠幽妙なる形而上學的思辨に馳するを戒め、孔子の性と天道を言ふを避けて怪力亂神を語られず、スピノーッアが自家の哲學上に構成せる宗教の思想信念を有しをりしにも關はらず、一日瀕死の老嫗がスピノーッアに向ひ妾は神に救はる可きかとの問を發するや、スピノーッアは自己の哲學的思辨の結果たる抽象的一元論を説かずして、却りて通俗の基督教を以て之れに答へたる所以なりとす。是れハートマンも亦氏が万有單一神教 (Pantheismus) の哲學的宗教、即ち精神の宗教 (Religion des Geistes) を以て民間の信仰と爲すの困難なるを自覺して、その思想の實際人民の宗教と爲る迄には數多の年月を要せざる可からず、而かも此時や既に科學は今日よりも數層その歩を進め、而て縱令その科學の進歩にはハートマン自らの思想も與りて力あるものたるには相違なしと雖も、自家の哲學思想が民間の宗教として尊信せらるゝの時は、其當時の學者の思想は層一層高度の進化發達の歷程に迄進みをれるものたるを説きし所以なりとす (Ich weiss sehr wohl, dass die mit dem Kulturfortschritt wachsende Rückständigkeit der Masse gegen die Kulturtragende Minoritäten gegenwärtig mindestens auf

本

論

Jahrhunderte zu schätzen ist, und dass es deshalb mindestens noch einiger Menschenalter bedarf, ehe der Boden zu einer praktischen religiösen Neubildung in Volke vorbereitet ist. Wann diese Neubildung nach meinem Tode eintreten wird, überlasse ich getrost der Vorsinnung, und hoffe dass dann die Wissenschaft auf über mich längst hinausgeschritten sein wird, wenn auch nicht ohne mein Lebenswerk als Baustein zu konserviren. Hartmann: Religion des Geistes. Vorwort VIII.) 也。果して然らば哲學即ち宗教なりとの解釋は高尙なりと雖も、人民の宗教としては到底行はる可くもあらざらんとの疑問起ころ。然れど吾人を以て之れを見るに學者證信の哲學思想を以て人民の宗教と爲すには多少の困難は伴隨するものある可しと雖も、決して不可能の事には非ずと信ず、何んとなれば釋迦や基督の如き自家の哲學思想を宗教として民間に布宣弘通せんとするに當りては、大に哲學的思辨を避けたりと雖も、然かも尙之れを常人凡俗の智識に比すれば一層高尙なる所のものたるを失はず、然るに釋迦基督は能く之れを成功したり、釋迦や基督が人民の智識よりは一層高等なる思想を以て動もすれば不解に了らんとする人民に向ひて之れを説示して遂に成功したりし

所以のものは、一に彼等が宗教家として自信教人信の旨趣を了し、慈仁博愛の熱誠的至情を以て彼等衆生に對せるに由り、其偉大なる人物の感化力は能く彼等をして此成功を致さしめたるものとす、果て然らば哲學即ち宗教なりとの立脚地よりして自己の哲學思想を以て直に民間の信仰と爲さんとするに當り、其成ると成らざるとは大に其人物の感化、其運用の妙何んに在りて存するものとす。是れハートマンの如き學者的人物に在りては或は成功し難きものありて存するならんが、彼至誠息む無きの熱情に支配せられて、大悲普く化するの釋迦基督の如き宗教的實際的の人物に在りては能く容易に成効し得るものとす、斯の如く學者の哲學を以て人民一般の宗教として弘通するの成不成は主として人物の感化何んに由ると雖も、之れと同時に其哲學思想は成る可く之れを公式的に云ひ表はし、出來得る限り哲學的高遠の理論を避け、通俗卑近に之れが説明解釋を施し、以て彼等の宗教的意識を満足せしめんとを努めざる可からざるなり、此に於てか其教説や主として道德的方面の訓誡格言の主要なる部分を占め、教主は勢この方面を鼓吹するの多きを致すものとす、是れ釋迦や基督がその實際的

宗教上の生涯に於ては自家の實踐躬行は勿論、其口にする所も多くは道德的方面の事項たりし所以なりとす、然れば今哲學的思想を以て民間信仰と爲さんとせば、成る可く之れを通俗化して説明教説せざる可からず、是れ恰も物理學の如き學科が或は大學の教程に於て授けらるゝと同時に、或は小學の兒童にも教へらるゝと一般にして、要は説明解釋の精なると不精なると、密なると、密なるとに由るものにして、それが等しく物理的觀念を與ふるに至りては則ち一なるが如く、學者の哲學思想も之れを叙述するの方式上の差こそあれ、之れを通俗卑近に説明解釋せば能く民間信仰と爲り得可きなり、勿論通俗卑近と雖も、現今の佛敎家や、淺き墓かなる基督教宣教師が襲用せるが如き方便的虛誕の方術を用るよと云ふに非して、其叙述論明の形式を簡易にすると小學の兒童に授くるの物理學の如くす可しと云ふにあるなり、既に同一物理學にして或は大學の課業となり、或は小學の教程ともなり得る以上は、學者の哲學思想も、之れを説明解釋するの方法如何に由りては民間信仰と爲り得可きものとす、然れど吾人は哲學即ち宗教なりとの立脚地よりして、自己の哲學思想を以て民俗の宗教とせんとするに當

りては、その至誠なる宗教的熱情を要するや勿論にして、此宗教的熱情とその學說の説明の通俗卑近なるを以てせば、克く容易に成功し得可しと信ずるものとす。斯く云ふ時は人或は難じて謂はん、曰く若し彼の哲學者が思索せし所の最高原理を以て之れを人民一般に教誨説示せんが爲めに、之を記號的公式的に表明するに至らば、非人格的の實在は人格的となり、眞如は如來と化するに至らん、果たして然らばその所謂健全なる哲學的宗教なるものも畢竟成立宗教と何等の異なる所無きを見ん、然れば今若し彼の哲學者の思辨想定せし哲學思想にして、若し一朝之れを人民の宗教とせんが爲めに、之れを記號的に説述教示せざる可からずとせば、是れ矢張り從來の成立宗教を慣用すると何ぞ異ならんと、然れど吾人を以て之を見るに彼の所謂成立宗教なるものは、既に其思想や二三千年前の古昔に基き、而かも其後引續きて的々相承、成る可く、教祖の思想に戻らざる様牽強附會して其解釋を二三にし來りしと雖も、本世紀に至りて人智の範圍著しく増大せしより、何かに牽強附會するも是等の舊宗教を以てしては到底學者の宗教的意誠を満足せしむると能はざるに至れり、嘗に學者のみならず、一般普通

の人民と雖も、多少志ある者は何等か他に之れに代はる可き宗教思想を得んとを努めて荐に懊惱しつゝあるものなり、此時に當りて哲學者にして而かも宗教家を該ねたる絶大なる偉人の現出するありて、一方には自家獨特の哲學思想を以て智識ある者を感化して自己と同一なる安心立命を得しめんとを圖り、他方に在りては成る可く高尚幽玄なる哲理思想を通俗卑近に説明して、一般人民の宗教となし、彼等をして安心立命の素地を爲さしむるを得ば、縱令その宗教や彼等通俗の庸人に向ひては卑近淺薄の記號的説明となり、彼等に取りては結局或は之れを成立宗教に比して顯著なる差異なかる可しと雖も、少くとも斯かる哲學思想の下に成れる宗教を以てしては、今日彼の成立宗教が幾千年來共に伴ひ來たる百般の弊害陋習を一掃するとを得て、人民一般をしてその迷信を省き、多少眞宗教の趣味を感得せしむるを得るの便益ありて存するを見ん、之れを史に徴するに彼の基督教や佛教や皆實に斯かる旨趣の下に興起せられたるものなり、矧んや論者の思ふ如く學者の思想を通俗に説明開顯するに必ずしも記號的比論的の文字を弄し、寧ろ虚誕的方便の下に哲學思想を迷信化するの必要は毫

も之れ無く、却て學者の通俗講談を爲し得るが如く、その思想の道德的形式を主として、極はめて卑近に説明すると、恰も物理学を小學の理科指教として教示し得ると一般にして、何かに通俗卑近に説明解釋すればとて、強ち舊來の佛耶兩教に通有せる如く、其思想を迷信化するの必要は毫も是れ無きをや。更らに他の例を採りて之れを謂はんか、往時吾人の父祖がその兒子を育養しつゝあるの時に當りてや、その家庭の教育法はその兒子にして、兩親の命に従はざるときは、頗る妄誕の言を弄して之を叱し、之れを畏嚇しその啼を止めんと圖りしと頗る多かりしなり、例之ば兒子の譎詐を口にするの習慣あるや、之れを止めしめんと欲して、閻魔に舌を抜かるゝが故に斯かる詐言を口にする勿れと教ふるは昔時の家庭教育の一方方法なりしなり、然れど今日にては兒子を家庭にて訓育するに當り必ずしも斯かる虚誕的方便を用うるを要せず、斯かる超自然的方法を採用するを須るず、兒子の了解する限り諄々として正平なる道理を簡易卑近に教ふるに自然的方法を以てし、閻魔の名稱に更ふるに學校教師の命令を以てするも尙能くその目的を達し得可きを實驗するに至れり。今宗教の教誨も亦然り、宗

教の教誨にしてその對機は無智の人民なるが故に、之れに合理的正信を教示するには充分なる方便説に由らざる可からずとて、徒らに荒唐不替あられも無き妄誕説を附會して之れを教導するが如きは、却て宗教そのものゝ目的に反するの行爲にして、宗教の体面を汚濁するものと謂はざる可からず。今吾人の見る所を以てすれば、宗教も斯かる昔時に行はれたる如き虚誕的超自然的方法を以てせずと雖も、又能く簡易正平に高等の正信を通俗化して一般人民に教誨説示するが如き決して出來得可からざるの事業には非ずと信するものなり、何んとなれば宗教は無智の大人を教化して宗教の理を信奉せしむるの一種の教育にして、而て彼の小兒の教育なるものにして何等の虚誕的方便主義を應用せずして克く其教育の目的を成遂し得可しとせば、大人の教育のみ豈に獨り虚誕的方便を以てせずして合理的信仰を與ふるを得可からずとの理由あるを見ざればなり、斯く考察し來れば學者の信仰も亦能く通俗の宗教となり得可きものとす、是れ吾人の今日腐敗壞頽せる成立宗教に代ふるに哲學的證信上に成れる健全なる新宗教の勃興を切に期待して止む能はざる所以なりとす。

第三節 佛耶兩教の異同は那邊に在りや

三七八

吾人は既に宗教と哲學とは共に究竟的合理的證信にして、此兩者を全然同一視し以て歴史的に表はれたる宗教と哲學とはその敘述説明の形を異にするも、その質に於ては全然同一なる所以を論證せり、而して今日に於て智識ある者の精神的需要を満足するに足るの宗教はその形に於てもその質に於ても、共に哲學と同一ならざる可からざるものにして、唯その之れを一般民間の宗教として用ゐしめんとせば、その形を簡易ならしめて單簡なる數學的公式の如くなし、從來の如き虚誕的方便主義を廢して之れを宣布せば學者の宗教も尙之れを民間信仰として用ゐ得るの可能なる所以を論ぜり、而て又宗教は時に於ては古今の別無く方處に於ては民族の文野を論せず、人類社會に於ける普遍的事實にして、而かも哲學と等しく同一人性の必然性に基きて生起し來たりたる所のものたる所以を論明しをけり、既に宗教は究竟的合理的證信にして、其時代々々の人文開化の歷程に應じて、進化發展し行くものなれば、宗教も亦是れ人文史上の一現象にして人事界の出來事なり、即ち人間的事實なり、自然的事象なり、決して神的事

項にも非ず超自然的產物にも非ざるものとす、蓋し宗教の生成し來るや斯かる智情意を有する吾人々類が、斯かる環象の爲めに觸發感動せらるゝの結果、此に宗教なる一現象を生成し來るものなれば、宗教は實に吾人々性の必然性に基因する現象なりと謂はざる可からず、果して宗教は人生の普遍的事實にして而かも同一人性の必然性に基因しをるものとせば、佛敎や基督敎や又是れ等しく一宗教にして共に是れ人性の同一必然性に基因して生成し來りたるものなるが故に、佛敎にまれ基督敎にまれ、共に是れその根底より全然異同し互に相ひ矛盾しをる可きものに非ずして、その衝突や異同や畢竟假現的暫有的の結果にして、佛耶兩敎は世人の想像するが如く全くその根底より然かく相徑庭相異しをるものに非るを知る、何んとなれば佛耶兩敎は共に同一人性の奥底にその根據を有し、同一人性の必然性に應じて生成發展し來りたるの結果たるを以てなり、果たして然らば今日實際上、佛耶兩敎は何が故に現に吾人が目撃する如く、斯く、經庭相異しをりて互ひに相ひ、閔ぐの有様を生起し來りたるか、佛耶兩敎はその表現上その敎理の上に於てもその儀式上に於ても頗る相徑庭しをれるの

三七九

みならず、頗る衝突相容れざるが如き矛盾の分子をさへ含有しをるは明白なる事實なり、是れ果たして何等の原因あるに由りて然るか、佛耶兩教にして真に同一人性の奥底に其根柢を保有するものたらば、何にが故に斯かる氷炭相容れざる反對の形相を呈するか。吾人は今此問題に答へて左の如く謂はん、曰く然り、佛耶兩教は共に是れ人性の同一必然に基きて生起し來たりたるものなりと雖も、それが發表して實際社會に顯はれ來たりたるの時に及びては、一はアールヤ民族の間に一はアールヤ族の間に、一は猶太に、一は印度に表現し來たりたるものなるが故に、その人種の異同や社會環象の變化や、民族歴史の相異は、此同一人性に基因せる同一人類の宗教態 (Religiosity) をして一は基督教となり一は佛教となり一は有神教となり一は無神教となり一は他力教となり一は自力教となりて表現せしめたるものとす、是れ恰も言語は人性の同一根柢より生成し來たる所のものなりと雖も、一はセム民族の言語となりて表れ一はアールヤ民族の言語として表現し來たりたるか如きなり、然れば佛耶兩教は現今に於けるが如きその徑庭異同たる見來れば頗る多大なるものありて存し、儘と桷鑿相容れざるが如

き觀無き能はずと雖も、此兩者は根本的に矛盾し撞着しをれる所のものに非ずして、その終極に於ては一致調和す可き所のものとす、何んとなれば佛耶兩教は共に等しく必然的に人性の同一なる點にその確固不動の根柢を有しをるを以てなり、然れば佛耶兩思想にして從來の如く地の相距る千有餘里、世の相後くる、千有餘載、此兩教は全然何等の交渉も無く互に相知るの機會無かりし時に當り、一朝俄かに相見るの時機至りしとせんか、此兩教徒は各自其他教に於ける一切万事の奇異なる表現に驚き、互に他を以て異端視し邪宗視し教敵視し仇怨視するものありて存するならんと雖も、我邦の今日に於けるが如く我邦は滔々として彼の東西兩洋の二大思潮の流注點となりたる、彼の佛耶兩教も此日東の孤島に於て相會見するや、其當初に在りて互に相疾視しをりしも、漸く相近き相親み自ら思想の交通も生じ、彼此相識知するに至り、吳越も同舟、漸く將さに融合調和し來たらんとするに至るは自然の勢なりとす、而かも吾人は斯く佛耶兩教を以て斯かる融合調和を做さしむるに至るの原因は、決して偶然に非るものありて存する所以を知らざる可からず、是れ畢竟佛耶兩教とも共に同一人性の必

然より發生し來たれるの結果たるを以てなり、果して佛耶兩教にして必然的に人性の同一なる點に接觸發動され來たりたるものなりとせば、斯かる同一人性に淵源せる宗教の永がく背反際離しをるの理由毫も是れ有る可きに非ず、斯かる永遠の背反際離は却て奇怪の現象にして、佛耶兩教の融合調和は眞に是れ必然の數なりと謂はざる可からざるなり、然れば今日吾人宗教を專攻するの學者に在りては、佛耶兩教の差異如何んを尋釋討究するよりは、寧ろ佛耶兩教の類同點の那邊に在りて存するやを考覈闡明するを以て其眞の研究題目と爲すに至りたるものなれ、是れ尙彼の生物學者が今日に在りては動植二界の區別を研究するの迂を避け、動植の兩界は果して那邊に於て一致し來るやとの研究に従事しつゝあると一般なりとす、果たして宗教學研究の結果佛耶兩教の異同は眞にその表現上に於ける暫有的假現的に存在せるものにして、その本質本性に至りては畢竟同一に歸して止む可きものたるの理を明瞭ならしむるを得ば、又實際上にも佛耶兩教は永く相敵視し互に反目しをる可きものに非ずして、此兩教徒は和氣霽々の中に莞爾として互に手を携へて以て一堂の下に會し、釋迦や基督や

の宗教的大精神の實現に努む可きを覺悟するに至らん、果して然らば是れ當に從來の宗教的争闘は全然靜謐に版し、國家人類の爲め至幸至福なるのみならず、又彼れ等宗教の眞面目を發揮するの時運に向ひたるものと謂ふ可く、最も廣き意味に於て約翰傳に所謂我は此年に非る別の羊を有り、彼等をも引來らん、彼等わが聲を聞かん、遂に一の群一の牧者となるべしとの理想を實現し得可きなり、知らず現今我邦に生息せる佛耶兩教徒は果たして這般寛容の宏度ありや否や。

第四節 一大新宗教勃興の機

前節に於て略辨したるが如く、佛耶兩教は今や將さに世界思想の首府たる日本の大帝國內に東西より流注し來り、理論上にも實際上にも、鎬を削りて此所を先途と必死に雌雄を争ひつゝあるものゝ如し、然れど佛耶兩教ともその教理儀式共に昔日の儘にては、理論上實際上到底今日吾人の進歩せる宗教的意識を満足せしめ得る能はざるものとす、然れば是等兩教は到底その一の他を壓伏して全然一方の全勝に歸し得るが如きとは時世の要求上万々有り得可からざるものとす、此に於てか、是等兩大宗教の思想を歴史的に繼承し、是れに加ふるに現今

に於ける哲學科學の新智識を以てし、是等各思想の統合調和の上に組織建設せられたる一大思想の輪奐を煥發し來たりて、初めて進歩せる思想界を制御す可きの宗教を形成するに至る可きや自ら豫想し得可きなり、何んとなれば今や東西兩洋の哲學宗教は滔々乎一瀉千里の勢を以て我國の思想界を卷席し來り、吾人の智識經驗は日に増大し來れるの今日に在りては、到底舊來の哲學や宗教やのみを以てしては吾人の精神的急需に應じて満足なる結果を與ふる能はざるものとす、此に於て感覺的懷疑思想の妖雲は漸く將さに天の一方より表はれ來らんとせり、此時に當り能く是等感覺的懷疑的思想の妖雲を攘掃して、吾人々類をして爽絶痛快の新清涼劑を投ずるものは、是等新智識の中に在來の宗教を統一し、而て更らに一層宏大なる宗教の建設を遂げ、而て此根本主義の下に自信教人信の至誠を以て實踐躬行自ら一世を化育せんとするの大先覺者を以て自ら任ぜるの大手腕家たる宗教的天才に由りて初め能く成功し得らるゝの結果なりとす、嗚呼斯かる宗教的天才たる者は果たして誰ぞ、蓋し我邦の今日に在りては斯かる宗教的天才の出現を要望して止まざるとは大早の雲霓を望むよりも太

甚しきものあらん、知らず斯かる天才は果たして何れの所にか潜める、或は又斯かる天才の出現には時機の尙未だ順熟せざるものありて存するか、奚ぞ斯かる天才に向て世人の望を屬するや大にして、而かも尙その出現の遲きや、吁嗟之れを史に徴するに、彼の基督出現の當時は羅馬帝國は四海を一統し、猶太思潮と希臘思潮とは世界の首府たる埃及のアレキサンドリアに於て相會合し互に接觸し來たり、加ふるに當時猶太人の智識經驗は著しくその範圍を増大し、猶太の思想界は到底昔時の舊套を以てしては、以て人心を満足慰安せしむる能はず、國內の宗教界はエツラの儀式的の律法主義と化石し去り、積弊陋習は著るしく累積し來り、見る者をして一見嘔吐を催さしめんとするものあり、是れ恰も現今我國に於ける思想界の潮流と全然その致を一にし、我邦は今や一方に於ては智識經驗の増大と共に、一方に於ては在來の宗教たる佛教は單に今日我邦の精神界に於ける信仰を維持しをるを得ざるのみならず、幾多の蓄弊陋習の積集累堆は牢として抜く可からざるものあり、從て非常なる迷信的害毒を民間に流布しつゝあるが如きなり、此秋に當り昔時猶太に於ては俄然として宗教的天才は時

世の必要に應じて表はれ來たり、從來の猶太的狹隘なる國民思想の拘束を離れて増大せる當時人智の有様を達觀して、一大新宗教を創建せしの人あり、此人を誰れとか爲す口く「ナザレ」の賤夫耶蘇その人なりとす、彼れは大聲疾呼從來の猶太的國民的の狹隘なる偏狹主義 (Particularism) を離れて世界的人類の普遍主義 (Universalism) を喝破せり、當時彼れ基督が極力主張せし純乎たる宗教心より混々として洩出奔流せる救世の福音はその理想の高かき主義の清き思想の高大なる到底彼れ儀式的律法的にその頭腦を化石し去りたる猶太の普通人民に在りては、積習の牢として抜く能はざりしものありて存し、彼等が先覺者指導者たる基督の天職を解する能はず、彼れが真正の福音の眞味を解すること能はずして、遂に彼れ基督を磔殺するに至れり、雖然時代精神の向ふ所は滔々として又禁ず可からざるものあり、この時代精神は遂に彼れ基督の口を藉りて以て猶太固有の思想たる偏狹主義の舊圈套内に甘んずる能はざらしめ、俗耳に取りては宛然青天の霹靂たるが如き世界的普遍主義を大喝道破せしむるに至れり、然れど今退いて考ふるに彼れ基督をしてその死を恐れず、懲容として自家所信

の新宗教主義を公言して敢て憚らざらしめたる所以のものは、則ち當時之れを外にしては猶太希臘の兩思想は洶湧として當時の思想界に流注氾濫し來たり、人々その智識經驗の範圍をして著しく増大擴張するあらしむるに至れり、之れと同時に内を顧みれば猶太の律法宗教は積弊百出又救ふ可からざるものあり、此に於てか基督は自ら天命を負ひて救世主の天職を全うせんが爲め、從來の宗教的意識を革新して之れを補ふに當時増大し來たれるの新經驗を以てせしなり、此意味に於て彼れ基督は在來宗教の革新者たると同時にそれを大成したる偉人なりと稱し得可く、苟も明晰適切なる毫も修飾無き辭を以て之れを云へば、基督は當時に在りてはその社會に於ける先覺者の思想を以て新宗教を創設したるものなりと謂ひ得可きなり、故に後人此意味に於て之れを彼れ基督の名稱の下に基督教と稱するに至れり、是れ實に彼の基督教なるもの、由りて起こるの因由なりとす、今や顧みて我國の思想界を觀察するに東西兩洋の思想は注湃として我國に集注し來り、從て吾人の智識經驗を増大し、我國の思想界の攪亂紊擾せる彼の基督在世の猶太國に譲らず、而て我國在來の宗教が外形的虛式的に化

石じ去りて何等人心に對して宗教上の精神的感化をも與ふる能はざるは又アリサイ人の形式的律法宗教の弊害より尙甚しきものありて存するを見る是れ實に我國人の上下舉りて頻りに精神的飢餓を訴へつゝある所以にして吾人の新宗教勃興の機を喚べるもの又實に偶然に非るなり知らず斯かる宗教的天才たる廿世紀の釋迦たり基督たるもの果して誰ぞ。願ふに彼の晩近に至りてその行動を頻りにせる歐米に於ける倫理運動の大にその氣焔を高めたる如き嚮者幾多有名なる學者社會に於ける日本主義の鼓吹せられし如き又彼の先年進歩思想に富める有力なる諸名僧の手に由りて爆發したる東本願寺改革運動の如き又先年我國に開かれたる佛耶兩教徒の會合の如き近年に至りて丁曾倫理會の主意書頒布學術演說公開の舉の如き佛教清徒同志會の組織せられたる如き是等は皆從來の教學のみを以て到底満足し得ざる我が國人心の依りて以て鬱勃の氣勢を洩さんとせるの噴火口たるものにしてルーテルの宗教改革に先ちてヨハン・フッスやヰクリップの輩出するありて一死以て主の教に殉じ當時民心の奥底に鬱結せる不滿の情火を漏泄せしと其の軌を一にせるものと謂ふ可く

又之れを民間信仰に徴するも天理教蓮門教等の淫祠は相踵ぎて勃興し日にその繁榮を致し來るが如きは我國下等社會に於ても等しく彼れ舊佛教なるもの無勢力を示めし特に佛教の他力宗と自力宗とを折衷したる妙力宗なりと稱してその教師は洋服に輪裳を着し觀音を本尊として布教しをれる救世教の如きその折衷主義の淺薄にして頗る笑ふ可きものたるや固より論無しと雖も斯かる折衷主義の民間信仰として表現し來るに至りたるは一に現代の人心が現時の宗教を漸く見捨てんとしつゝあるを反證するに餘りあるものとす。嗚呼回顧し去り回顧し來れば是れ等の諸現象は我邦上下舉て彼の病的舊信仰を抛擲し何等か他に健全なる新信仰の勃興を急需し來り以てその準備前提をなしつゝある者に非るか固陋頑迷なる佛教徒は或は謂はん今回東本願寺か佛教公認問題に狂奔し宗教法案の政治運動に着手するや或は布教使を派し或は説客を遣はして脅迫的に信徒の迷信を利用して遊説を試みしめたるの結果加越の信徒は吾人をして轉た彼の石山一揆の昔を偲ばしむるの勢を以て東京に蟬集し來たりしに非ずや是れ明かに舊佛教の勢力尙衰へざるものあるを證明し

をるの事實なりと、嗚呼彼等は聞くや聞かずや彼等草鞋竹笠水盃に念佛を稱へて、遙々上京せし翁媪等の見孫は、その小學校に通ふの途上その口にする所の童語を、斯かる兒童少年が朝夕學校教師より習得しつゝある諸般文明の學術は、彼等の頭腦をして最早や彼の法談僧の怪誕虛妄の病的佛教の説法を受容せしめざるの準備を爲しつゝあるに非ずや、顧ひて此に至れば舊佛教の命脈もその危殆なる宛も累卵の如く、又死期に瀕せる風前の燈火たるに過ぎざるものなるか。

第五節 佛教界に於ける新舊兩思想の分離

先是既に我邦に於てその時代精神の所産として、早く明治佛教界には明かに媒介主義即ち進歩的折衷主義の佛教と、頑迷固陋なる守舊主義との破綻を見るに至れり、頑固なる守舊主義の佛教とは、彼の徒らに頑迷なる巧辯詭辭を弄して、數百年間次第相承の講録的斷片の智識を楯として、經文の一字半句をも釋迦の眞説なりと盲信し、獨斷的に相承的習慣佛教を主張しをるもの是れなり、之れに反して稍進歩せる思想を以て時世の趨向する所を察し、多少唯理的傾向を以て批評的眼光の下に佛教を観察するとを忘らず、從て聖典の一言隻語も佛の眞説な

りと固執するが如き盲信に陥るを避け、佛教を解釋するに今日の智識を以てし、以て彼の泰西新來の科學哲學と舊來の佛教とを折衷的に調和せんとするものあり、吾人之れを呼びて媒介的佛教徒と稱す、既に彼等は批評的に道理に照らし、て佛教を観察し、自己の理性に訴へて道理上信憑するに足らずと想定したる所のものは、何かに千百年師授弟承の所説なりと雖も、必ずしも之れを株守するを須みずと爲し、若くはその既に陳腐に皈したる所説の佛教に於て頗る重要缺く可からざるものあるときは、其陳説の佛教の爲に重要なるが爲めに、特に之れを牽強附會してその解釋を曲説し、以てその所説を今日に維持せんと努むる所のものなり、然れば縱令彼等媒介的進歩主義の佛教徒は、その佛教を説明解釋するの點に於てこそ、守舊的佛教徒と相異こそすれ、等しくその相承的佛教の根本原理を附會的にも循用しをるの點に於ては、彼れ守舊派の佛教徒と毫も異なること無きものなり、換言すれば彼等媒介主義の佛教徒は一方にては頑迷固陋なる守舊的佛教徒に對して、その内部より刺撃を與へて時世の進歩に伴隨せしめんとし、一方に於ては世間の學者に對して佛教辯護の衝に當れる、恰も西洋に於ける

媒介神學者 (Vermittelungstheolog) に類せるものありて存するなり、彼れ媒介神學者が現今の新智識の下に在來の宗教を科學的に説明解釋し、以て現今に於ける哲學科學の攻撃を避け、吾人精神の需要を満足せしめんと企圖しつゝあるの故を以て、之れを科學的神學者 (Wissenschaftlicher Theolog) と稱するが如く、現今我邦に於ける媒介的佛教徒は之れと同一の意味を以て又之れを科學的佛教徒と稱するを得可きなり。蓋し彼等の佛教を説明するや一に吾人現今の理性を本とし、自然的智識を標準としてそれを解釋せんと努むるの點より之れを云へば、十八世紀の唯理的神學者即ち自然神學者と全然その軌を一にするものとす、而て西洋に於ける彼の媒介神學者なるものが、基督教を今日に於ける吾人の智識に照らして信憑し得る様に説明解釋し、從て新酒を古瓶に盛り新思想を舊衣裳の下に藏くすの奇觀を現じ、一方に於ては世間の學者より姑息的綑縲主義なりとして輕侮嘲笑せられ、他方に於ては寺院僧侶等の守舊派よりして媒介神學者は宗教部内より欺を世間の教敵に通ずるものなりと見做され、譴責痛擧せらるゝの甚しきものあり、媒介神學の勞多くして功少なき吾人は轉々彼等の爲に悲まざる

を得ざるが如き事情に陥りをれると一般、吾邦の媒介的佛教徒も又一方よりは頑僧等の攻撃する所となり、動もすればその譴怒に觸れざる可からざると同時に、世間の學者よりは尙その因循姑息なる綑縲主義を嗤はるゝと屢々是れあり、思ひて此に至れば此派一流の佛教徒の心事や頗る憐む可きものありて存するを見る。之れを要するに媒介的佛教徒は彼れ守舊的頑僧等と共に最早その佛教に對するの舊信仰をその儘持續しをる能はざるを自覺すると同時に、感情上習慣上未遽かに舊來の佛教を全然捨て去るに忍びざるの關係ありて存するものなり、此に於てか彼等は恰も西洋に於ける十八世紀の唯理的神學者と輓近に於ける媒介神學者とを折衷せし如き位置に立ちて、相承的佛教の一切を採用せざると同時に、舊來の佛教中より得來たれる今日、吾人の理性に照らして尙信憑し得る幾多の教條や、多少現今吾人の理性に照らして信憑し得る様彼等の手に由りて修正改竄したる佛教々理を奉戴し、是れを以て佛教の原理通則なりと爲し、それを信奉遵守しをるとの點に於て彼等は尙明かに佛教徒なりと稱しをるとを得可く、而て其狀恰も十八世紀の唯理的神學者の一派が基督教の根本原理と

して、自己の理性に適應せる神の存在と靈魂の不死と意志の自由との三原理を抽出し來りて之を以て真正なる基督教本來の面目なりとなし、當時正統派の主張せる他の一切の奇蹟的基督教は全然之れを排斥して真正の基督教に非ずと爲し、自己の理性に適合せる基督教の教義のみを以て真正なる基督教と稱しをると一般なりとす。然れば西洋に於ては十八世紀に於てその所謂自然神教學派と稱する自由的進歩主義の基督教徒と、正統派の基督教徒とはその思想上に明白なる破綻分離を致し來たりたると同く、我邦に於ける明治の媒介的進歩主義の佛教徒と守舊頑迷の佛教徒との間には最早や掩ふ可からざる思想上の大鴻溝の横はれるありて存し、今日に在りてはその精神的破綻分離は實に覆ふ可からざるの事實なりと謂ふ可きなり。

第六節 最近に於ける佛教自由主義の勃興

媒介的佛教徒は彼等守舊的佛教徒の眼光を以てすれば全然外道なり惡魔に等しきものなり、何んとなれば前者は後者の認めて以て神聖にして唯一なる萬古不變の教權と爲せる所のものを以て、一も二も無く必しも信奉しをらざるを以

てなり否な其思想は時に或は之れが改竄修正をも企てんと馳せ去るものにして、佛の手に由りて與へられたる神聖なる賜寶を人の手を藉りて汚濁せんと擬するものなればなり、是れ此佛教の新舊兩派間には救ふ可らざる思想上の破綻分離を來たしたる所以にして、尙西洋に於ける聖教主義 (Katholicismus) と新教主義 (Protestantismus) との破綻分離の如きなり。然れど吾人の見地よりすれば此媒介主義を主張する佛教徒にして彼の守舊派に屬せる佛教徒が目して以て佛教に非ざる外道惡魔なりと貶黜し去る所の媒介的佛教徒も、又明かに理論上よりしては一佛教徒なりと主張するの權利を有するものとす、何んとなれば彼れ媒介主義の佛教徒は佛教の理論上尙明かに具體的なる或種の根本原理を尊信奉承しをるものにして、具體的歴史的特色を帶べる佛教の根本原理や又明かに彼等をして基督教徒等の他の宗教信者より彼徒を區分せしむるの種徴 (Differentialia specifica) を與ふるものなればなり、然れど媒介的佛教徒の思想は兎角世人の批評を免れざるが如く、その主義一に因循姑息なるものありて存し、その目的又彼等の新思想の下に舊佛教の弱點をも修飾辯護せんとするにありて存す、是

れ實に顯著なる彼等の弱點にして、從てその聖典を解するの上に於ても自ら成案批評 (Tondenzkritik) に奔逸し去り、彼等の謂ふ所は多くは未以て眞理是れ努むるの完全なる科學的研究なりと稱し得可からざるの不齊合的結果に終はれり。蓋し吾人の嚮者に本章第一節に於て辯明しをきたるが如く、成立宗教は最早や今日の科學哲學の武器を藉り來たるも之に由りて到底辯護し得可からず、若し強いて之れを辯護せんとせばその極牽強附會に陥り竹に木を接ぎし不合理不齊合を來たし、或は之れを以て他人の宗教心を利用してそれを欺き以て俗僧の私利を貪るの具としてはいざ知らず、それは到底充分に吾人の精神的需要を満足せしめ能はざるものとす、然れど彼の媒介的舊佛教徒は新舊兩思想の斯かる無用の調和媒介に盡瘁努力しある所以のものなれば、勞多くして功少なく、畢竟その結果の兎角遅々として今日尙ほ擧がらざる又實に怪むに足らざるなり、而て斯かる學説が彼れ佛教徒の中に在りて直情徑行一意専心眞理是れ期するを以て目的とせる勇往敢爲の新佛教徒の精神的需用を満足せしむる能はざる又實に其所なりと謂はざる可らず。此に於てか佛教の自由主義は起れり、自由主義

の佛教徒は固より彼れ舊佛教が古來より尊信奉承せし佛教教理なるが故にとて強いて之れを排斥し去らんとするの絶對的破壊主義を好むものに非ずして、勿論彼等も眞理たる所のものは一に之を遵守確信して能く之を保存し、之れを自家所信の佛教として永久に護持せんとを努め怠らざる所のものなり、然れど之れと同時に從來媾和し難き佛教の敵と見做され居たる基督教の主張する所と雖も、苟も眞理にさへ契合しをらんか、又之れを採用して自家行動云爲の規範、信念の規矩と爲すに寸毫も躊躇せざる所のものなり、要はその期する所一に眞理に在りて存するものとす、彼等は眞理の爲めに動き眞理の爲めには殉死せんとを辭せざるものなり、その志や高潔にその目的や遠大なる千萬世の後世釋迦基督をその地下に喚起し來たりて之れを見せしむるも恐らく一毫をもその上に加ふる能はざらん、吾人は二千歳の昔時彼の希獵の聖哲アリストテレース氏の所謂プラトーンは愛す可きも眞理は尙愛す可しと喝破せし千歳不朽の眞理は明かに現時自由佛教徒の主義言論の上に躍如たるを認めずんば非らざるなり。此點に於て彼等は能く時世に媚びず凡俗に阿ねらず、専心一意眞理是れ

愛し眞理是れ伴とする所のものなれば、彼等は實に彼の希臘人の謂へる意味に於て明に實理の愛求者眞理の好伴侶たるもの即ち哲學者たるの本量に背かざるものとす、然れば彼等の寛容主義たる公明正大に佛教教理の眞に眞理たる所のものを採用すると同時に、更らに現今の科學哲學の諸智識をも併せ容るゝに吝ならず、基督教の教理をも苟も眞理たる以上は彼れ等が佛教の教理に對すると同一の尊敬と至誠とを以て之れを信奉するに躊躇せざるものなり、その自由主義や可なりその思想の公平なる彼等の如くなるは蓋し甚だ稀れに見る所のもの、然れどその思想上の自由主義は頓がて彼等の所謂佛教徒なる所以の理由を没却し去りて、論理必然の結果彼れ等の何にが故に佛教徒なるかを理論上には齊合的に公言すると能はざらしむるに至りしものとす、何ぞや、抑々彼等自由主義の佛教を主張せんとせば佛教にまれ基督教にまれその他現今の科學哲學にまれ、それは苟も之れを眞理と認むる以上は等しく之れを採用して之れを信奉せんとするは彼等の根本主義なり、然れば彼等が採りて以て自家所奉の根本主義なるものを建設せるものの中には、佛耶兩教の健全なる思想は勿論、科學哲學

の諸思想の重要なるものも一切之れを包含しをるものなれば、若し幸に是等の諸思想中佛教的分子の比較的に夥多なるものありとせば、尙或は以て其佛教々理の比較的に夥多なりとの點に於て、彼等所奉の主義を以て佛教なりと稱し得可きも、若し佛教々理の比較的少數にして、却て他の方面より得來たりたる思想の重要なるもの、夥大にして、それが却て彼等の所奉せる根本主義の中心核實を爲すものたらんには、尙彼等は何んの理由に依りて、か斯かる主義をも等しく戀々として一種の佛教なりと稱せんとする乎、若し強いて之れを佛教なりと云はば、斯かる主義は之れを佛教なりと呼び得ると同一の理由を以て、又之れを哲學主義とも科學主義とも一種の基督教とも稱し得るに非ずや、而てその思想の歸着する所斯かる場合にも立ち至る可きは、彼等思想の趨向として決して不可能なるものに非ずして、却てその可能や必然的結果なりと見ざる可からず、否や、啻に理論上それが可能たるに止らずして、實際上今日彼等自由主義の佛教徒の精神を忌憚無く解剖し來らば、斯かる意外なる結果を發見するに難からざる可し、果たして然らば、彼れ等は斯かる自由主義を採りながら何が故に自己を目して獨り

四〇〇

佛教徒とのみ稱して他教學の下にその主義を呼ばざる乎、若し又彼等にして苟もその學說教理の眞理にさへ契合せるものありて存すれば、それは則ち眞理是れ目的とせる佛教の本旨に眞に善く契合せるものなるに由り、それは則ち佛教なるが故に吾人は斯かる諸種雜多の教學を包含せる吾人所奉の主義をも等しく之を佛教なりと稱するも毫も憚る所無きなりと謂はば、吾人は更らに問はん、彼等が斯かる一切の科學哲學等の思想をも之を網羅し、それが眞理に契合しをるとは、佛教の眞目的と同一なるが故に、以て等自しく家の主義にも佛教なる名稱を冠得しと謂はば、佛教と他の教學とを區別す可き種徴は果して那邊に在りて存するか、若し夫れ論者にして佛教と他の教學とは苟もそれが眞理たる以上は寸毫も異なるも無き者にして、結局佛教と他の教學とは眞理の異方面を表さばしむるものにして、その本性上には何等の異同あるも無し、唯其異なる所は同一眞理の表現に歴史的人種的發達の色彩を帯び來たるが故に、一は佛教となり他は基督教となりて表はれ來りしも、その思想の由りて基く根底に於ては何等の異なるものあるを見ず、是れ吾人が佛教と一切他の教學とは苟もそれが眞理たる以上は

四〇一

同一に皈すと論ずる所以なりと謂はば、吾人又實に論者の言を諒す、然れど論者の説く所を以てせば、それは佛教と他の教學との區別を表白せる所以に非ずして、是の言や却てその一致を證明するもの、畢竟佛教と他の教學とは何等の根本的本性の差異あるも無しと主張するに同じく、佛耶兩教を初めとして諸多の教學は本來同一にして何等の異同ある可からざる所以を反證しつゝ、あるものとす。既に一切の教學はその本性を闡開し來らば畢竟同一なり、果たして然らば論者は何が故に特に論者の立脚地を殊更らに一種の佛教と稱して他の名稱を用うるを廢止したるか、是れ到底百年論者の立脚地よりしては解釋し得可からざる所のものなり、蓋し此問題は論者の立脚地を以てしては到底満足なる解答を與ふる能はざると同時に、一切の宗教や哲學科學の同一人性の發現の異形相たるを反證して餘りあるものとす。媒介主義の佛教徒は或は謂はん、今日自由主義の佛教徒の信奉せる佛教の教理以外に、之れと同量の若くは之れに幾倍せる他の教學の根本主義とを打ちて一團となし、此に自由主義佛教徒の宗教的意識を形成し、而て此に之れを佛教と稱しをると雖も、今日彼れ自由主義の論者が主張

せる所の佛教主義も、之れをその原始に遡りてその本源を釋ぬれば、畢竟釋迦その人の精神中に早く既に成案として含蓄されをりし所のものにして、それが偶々今日に至て發達開展し來たりたるものなれば、それが何かに佛教教理以外に他の教學の思想を含有しをればとて、等しく之れを佛教と稱するも何んの不可か是れあらんと。斯く論ずるときは自由主義論者の呼べる佛教なる稱呼の何が故に佛教なるかは之れを明答し得可きも、此媒介主義の佛教徒の與へたる説明も、亦甚しき非科學的非心理學的の獨斷論なるを如何せん、何んとなれば論者の説に由れば、今日科學哲學等他の教學より得來たりたる思想と、之れに吾人の真理と認めたる佛教教理とを加味して得たる思想が、既に斯かる形式の下に、既成的腹案として釋迦の精神中に潜在しをるものなりとの説は、到底今日吾人の心理學上の智識能く之れを首肯する能はざる所の説にして、自由主義を採れる佛教徒の、斯かる媒介神學者の彼等に寄與せし姑息的非科學的説明を以てして、以て自家の立脚地を解釋せしむるは、寧ろその不快とする所ならん、何んとなれば斯く謂ふ時は現今吾人が佛教々理以外に諸多の教學を統合して組成したる結果

を既成的に先天觀念 (Angeborene Idee) として成案的に釋迦の精神中に既存しをりしと説くものなればなり、豈に姑息的細縫的説明の是れより甚しきものあらんや、或は彼れ自由主義佛教徒は、釋迦の精神は諸多の思想と相待ちて、後代に彼ら等の今日現に有しをるが如き自由思想として、發達開展し來たるの可能性のみは之れを具有しをりしとを承認するものならんも、それは既に可能性なるが故に何等一定せる形式ある思想としては之れを見るを得ず、謂はゞ混沌たる無差別的なる沖漠無朕の虛態なりと謂はざる可からず、既に釋迦の精神中に潜在せる所のものは單に後世に發達開展す可き何等の規定も無き可能性たるに止らば、その或特性は今日自由主義佛教徒の想定せる如き思想となり得可しとの可能は即ち是れ有る可しと雖とも、之れ實に彼等自由主義佛教徒の腦中に、現今形成せられをる所の、具體的に發達したる思想そのものなりとは、吾人は到底之れを認容する能はざるものなり、此に於てか彼の媒介神學者流の一派が、自由主義佛教の爲めにその立脚地に説明の勞を取りし媒介佛教徒の解答も、畢竟無用の徒勞と化し去り、何等健全なる解釋たるを得ざりしものとす、且つや彼の媒介神

學者の云ふが如く、既に佛教教理以外に諸多の教學思想の合理的なるものは一切之れを採りて成れる自由佛教を主張する人々の信奉せる佛教原理なるものは、それが單に可能性たるに非ずして、一種の形態を有せる佛教の教理たる以上は、若しその原理が腹案として釋迦の精神中に在りと云ふを得可くんば、それは又基督の思想中にも等しく腹案的存在を保藏しをりしとも謂ふを得可く、而かも斯く謂ふも毫も不可なるの理由を發見する能はざる可し、果して然らば自由主義佛教徒の信奉せる佛教原理なるものを以て、之れを佛教なりと謂ふと同一の意味を以てして、等しく基督教なりとも稱し得可きなり、果して然らば之れに由りて佛耶兩教の區別を初めとして、佛教と他の教學とを區別せんと到底得て期す可からざるものとす、從て彼の自由佛教徒が自家所信の證信を以て單に可能性として釋迦の思想中に存在すと解するも、尙等しくそれは可能性として基督の思想中にも存在しをりしとも稱し得可きものたれば、之れを以て佛耶兩教を區別して斯かる可能性の存在を信するが故に、彼等は佛教徒なりと稱し得可からざるものとす、蓋し斯かる可能性は何等の特種性をも有せざる普遍原理なるが故

に、佛耶兩教を辨別區分するに足るの種徴たるを得ざるものとす。此に於てか更に自由思想を有せる佛教徒は主張して曰く、若し彼の吾人所信の原理にして苟も奕世累葉歴史的に發達し來たれる佛教思想の最後の發達と何等か一關係を保有しをる以上は、その原理中には何かに他の思想の因子要素の入りとるゝと夥大なるにもせよ、尙吾人はそれを以て佛教と稱し得可しと。然れど是れ又前説と同く佛耶兩教を區別するに足るの種徴に非ずして、斯かる意味の下に彼等自由主義の佛教徒は果して能く佛教徒なりと稱し得可くんば、之れと同一理由の下に吾人は彼等を目して基督教信者なりとも呼び得るものなりと斷言せんとす、何んとなれば彼等は自ら基督教教理にして、彼等の道理上信憑し得るに足る所のものは、毫も躊躇すると無く之れを採用して、自家宗教の根本原理の要素となすものなりと公言しをるが故に、彼等は又基督教々理とも最後に發達せる一種の歴史的關係を保有しをると謂ひ得可きを以てなり、然れば此歴史的最後の表現として彼等自由主義佛教徒の宗教的原理は表現し來りたるが故に、彼等自由主義佛教徒がその所奉の宗教を以て、依然佛教なりと稱するの、矢張前諸

四〇六

説と同く佛教と他の教學とを區別するの種徴たる能はざるものにして、斯くの如きは偶々以て彼等が自ら呼びて以て佛教徒なりと稱ると同一の意味を以て、彼等をして等しく基督教徒なりとも稱せしめ得可ければなり。若し又彼れ自由主義の佛教徒にして、吾人が佛教上の解釋に自由主義を抱けるは、釋迦が眞理是れ愛し而てそを一切衆生に宣傳するを目的として拮据經營せられたると同一の精神を躰して、行動云爲するが故に、吾人は尙佛教徒なりと云はんとするものなりと主張するものあらんか、此言甚理あるが如しと雖も、尙ほ仔細に此言論を解剖し來たれば斯かる標準も是又彼等を基督教徒と判別區分するに充分なる種徴たる能はざるを知らん、何んとなれば眞理の愛求や眞理の弘宣や、何んの宗教の教主か之れを以てその根本主義とせざるあらんや、果して然らば斯かる根本主義は單に釋迦その人の根本主義たるに止らざるを以て、此根本主義を奉じをればとて、そを以て直ちに佛教徒なりとは未遽かに稱する能はざるものあり、否な斯くの如きは却て彼等自由主義佛教徒をして同一理由の下に基督教徒なりとも稱せしむるを得る所のものとす、何んとなれば基督亦眞理の愛求者に

して其の布宣者たるに外ならざるもの、彼れ等自由主義佛教徒は、その眞理を愛し眞理を宣傳するの故を以て、佛教徒と稱し得可くんば、等しく同一の理由を以て基督教徒なりとも稱し得可ければなり。

以上論明し來たりたるが如く、今日自由主義を奉ぜる佛教徒なるものは、彼等が提供せる何なる標準の下にも、到底理論上嚴密には彼等を目して以て佛教家なりと稱し得可からざる所のものとす、然り而て彼等が最早や理論上嚴密に佛教徒と稱するの種徴を缺如するに至りたるは、その原因一に彼等が佛教々理中の眞理に契當せる所の教説と、現今の哲學科學及び基督教々理中より採用せる諸原理とを同位に置きて之れを觀察せしに職由せずんば非らざるなり、是れぞ彼れ自由主義を抱ける佛教徒が自ら佛教徒なりと公言しをれるにも關はらず、吾人の從來論明せし如く理論上齊合的に彼等は最早や佛教徒たる能はざる所以の根本的要点にして、彼の媒介神學者の口吻を摸せる媒介的佛教徒が、尙理論上齊合的に佛教徒たるを得るの所以なる。然れど彼の自由主義の佛教徒が最早や理論上齊合的には佛教徒なりと稱し得られざるに至りたるは、實に時世の必

要上より必然的に生起し來たりたるの結果にして彼の媒介的佛教徒の思想をして尙一步を進めしむれば又實に此結論に到達せざるを得ざる所のものとす、今の時に當りて彼れ自由主義の佛教徒が眞理是れ標準とし苟も眞理にさへ契合せるものたらば佛耶の何れを問はず、之れに上下優劣の區別を認むるとなく、等しく之れを同位に置き、同等に之れを同一眞理として取扱ふに至りたるは、世の必然的要求にして、彼等の思想が眞個に能く公明正大にしてその間に一片の私心を挟まざる、能く事理を解したるの精神なりと稱し得可きと同時に、是れぞ實に又彼等が頼がて彼の永く互に相反目疾視しをりし兩教を融合統一して、更らに其上に建設せられたる一大新宗教の表現に前驅を爲す所のものにして、東西兩洋の宗教思潮が、一時に汪洋乎我帝州を衝いて至り、滔々奔流し來たれるの今日、哲學科學等の思想は斯かる宗教思潮の二大柱流の傍面より更に之れに有力なる刺戟を與へ、以て吾人の智識經驗の範圍をして著るしく増大せしめ、舊來の宗教道德を以て吾人の精神的需要を満足せしめ能はざるの危期に際せしめたり、然れば能く是等在來の教學を打ちて一團と爲し、更らに一層進歩したる

宗教の説定を成遂効果せしむるの素を爲しつゝあるものは、實に彼の自由主義の佛教徒なりとす、然れば將さに斯かる新宗教の創設せられんとするの今日に當りて、彼の自由主義佛教徒の思想は先づ漸く其範圍を増大し來たり、最早や舊來の佛教を以て之れを律せんとするも到底不可能なるに至り、彼等は嚴密に又齊合的論理必然の結果、最早や佛教徒と稱するを得ずして、却て彼等の思想の活潑なる、最早や佛教てふ小圈内に拘束し置かるゝを得ざるに至りたるは、眞に彼の佛耶兩教を融合統一して、更らにその上に一大新宗教を創設せんとするの豫程準備とも見るを得可きものなり。是れ恰も猶太に於ては基督の普遍主義の表現あるに先ちて、各預言者の自由主義が之れが前驅を爲すものありしと一般なり、然れば吾人は今彼れ等自由主義の佛教徒なる者に譴むるに、從等が佛教徒と稱するの權利無きを以てするものに非ずして、彼徒が最早や理論上齊合的に佛教徒と稱し得可からざるに至りたるにも關はらず、徒らにその佛教徒なる名稱に永く戀々しをるを止めて、勇らしく速に是れを放擲し去りてその思想の自由と擴張とを確守し、飽く迄も眞理の爲めに殉死するの覺悟を以て、現今眞に吾

人精神界の急需たる新宗教の樹立にその礎を與へんと吾人の實に彼徒に期待して止む能はざる所のものとす。斯くの如く今日我邦の佛教社會に於てその一部の佛教徒間に自由思想の著しく發達して殆んどその徒を目して以て佛教徒なりと稱し得可からざるが如き状態に立ち至りたると同じく、基督教社會に於ても既に彼の舊信仰の狹隘不健全なるに厭き果て一向健全なる宗教思想に到達せんと欲して、既に業に着々その方向に彼等の歩武を進めつゝあるものをユニテリアンとなす、ユニテリアンはその主義の下に諸種異様の人物を網羅しをるが故に、人に由りて同一ユニテリアン協徒と稱しをるも、その採れる所の主義を異にしをるや又争ふ可からざる事實なり。今その最も自由なりと稱せらるゝ所の者の説を聞くに、ユニテリアンなるものは自己所信の主義が苟も眞理に契合し、現今の科學哲學の合理的智識と一致せる健全なる宗教思想たる以上は、その自家所信の主義若しくは宗教の何たるを問はず、人種の異同民族の差別を論ぜずして、等しくユニテリアンはその歡迎に務め忘らざる所のものにして、斯かる人士は矢張之れを等しくユニテリアンなりと稱するを憚らざるものな

りと。果して然らば是れ吾人の細説を須るずして斯かるユニテリアンの主義立脚地は、眞に彼の自由主義佛教徒の主張する所と寸毫も異なる所無きは一目瞭然たるものとす。斯かる主義は極はめて寛容なる公明正大の思想なりと雖も、彼等自由主義の佛教徒が最早や佛教徒と稱し得可からざると同一の理由に依りて、彼等ユニテリアン主義の人々も亦等しく嚴密に又齊合的には之れを基督教信者なりと公言するの權利を失ふに至りたるものとす。若し又ユニテリアン中の某々氏等の言ふが如く、ユニテリアンは素と米國に於ける自由なる基督教信者の團體相會して、此に初めて成立せしものとすれば、此緣故上より尙基督教と稱しをるものなりと説けども、それは實に事物を區別分類するにその必然的の種徴を以てせず、その偶性に基きて事物を分類せしものと謂はざる可からず。試に思へ、ユニテリアンにして果して斯かる意義の下に能く基督教たるを得るの仕格あらば、今爰に等しく基督教を信奉しをれる人々相會して一商事會社を建設したりとせよ、此の商事會社は又等しく基督教なりと稱し得可く、若し又此に一行旅ありて偶々山路に踐み迷ひて日暮れ途遠きを嘆ずるの不幸に遭遇せ

んか、此時偶然にも此行旅は路傍に佛寺のあるを見て、此佛寺に一夜の宿を請ひしに當り、その行旅は縱令基督教信者たりしにもせよ、その佛寺に一泊せしとの縁故を以て、又等しく佛教徒なりと稱せざる可からざるに至らん、豈に斯くの如きの無理あらんや、今ユニテリアンの起原が米國の基督教信者の會合に初まりしが故に、その主義の何かに自由寛容なるかは姑らく措き、等しく之れを基督教徒なりと自ら公言せんとするが如き、恰も上に擧げたる商事會社や行旅の比喩に等しきもの、誰れか其愚を笑はざらん、果して然ば彼のユニテリアンなるものは、最早や自由主義の佛教徒が佛教徒と稱し得ざるが如く、自ら基督教徒なりと稱し得るの權利あると無きなり、然れどユニテリアンが最早や基督教徒と稱し得ざる所以は、實にユニテリアンのユニテリアンたる特色本性にして、ユニテリアンが現今智識ある者の思想を影響して、隱然宗教界に先覺者指導者たるを得る所以又實に此に存す、斯くの如く自由主義佛教徒やユニテリアンの一派が、宗教上にその思想の自由を尊重し、從て最早や齊合的に佛教徒若くは基督教徒なりと稱し得ざるに至りしは、既に時代精神が從來の世界的宗教より尙一層廣大普

遍なる宇宙的新宗教の樹立を暗々裏に促進準備しつゝあるものに非る乎。既に彼れユニテリアン教徒や自由主義の佛教徒や、彼等は最早や基督教徒たり佛教徒たりと稱するの仕格無きもの、而かも尙彼れ等は依然基督教徒たり佛教徒たるの名稱を襲用し、尙その襲用を希望しつゝあるが如きの觀あるは抑々何ぞや、是れ蓋し彼徒が之れに由りて凡俗に阿ねり、世間に媚ひ以て一向俗情を迎へんとしつゝあるの爲めなるか、果して然らば彼等は既に媒介神學者や媒介佛教徒の爲せるの嘔に習ふものに非らざる乎、那ぞ前に之れを排するの急にして後には之れを親らするの不齊合なるや。嗚呼此批難や彼等自由佛教徒やユニテリアンの決して免れ得ざる所のもの、然れど吾人を以て之れを見るに、彼等自由主義佛教徒が公明正大の思想と、卓抜不羈の精神とを以て、斯かる卑劣なる陋狹手段に出づるものならざるや固とよりなりと雖も、抑々彼れ等をして今日彼等が採れる主義の下に、尙依然自由主義佛教徒なる無意味の名稱を襲用して、恬然として内に省て心に疾しき感無きに安じをらしむる所以のものは、恐らくは彼等自身にも吾人の嚮者に既に論ぜしが如く、自由主義の佛教徒なるものは、或は

最早嚴密には佛教徒たるの仕格無き所以の理を自覺しをらざるに由るか、將た又縱令此義を自覺しをると雖も、ゲーテの既に謂へりしが如く理性を以て現實を除くるときは常に之れを除し盡し得ざるものありて存し、換言すれば今日吾人の思想をして實際世に行はれしめんとするには、諸多の障礙ありて存するもの、從て吾人理想の万一をも之れを現實化する能はざるものなり、故に彼の自由主義の佛教徒にありては、彼等が思惟せし新思想を以て今日直ちに之れを現實界に實行せんとするに當りては、豈に又幾多の衝突撞着の之れを妨ぐるもの無からざらんや、然れば彼等の理想を現實化せんとするには、尙又幾十年の後を待たざる可からざるに至るの止むを得ざるの事情も生じ來らん、尙他語以て之れ言へば彼等の究竟的理想目的たる世界統一の新宗教を稱道樹立せんとするに、尙時機の未だ順熟せざるものあり、その機縁をして圓熟せしめんとするの間は、縱令之れを知りつゝも、尙姑くその自由主義佛教徒なる無意味の文字の背後に匿かれて、聊か現今過渡期に所する應急の手段と爲し、而て隱然更らに彼等は、今や將さに來らんとする新宗教設定の準備を爲しつゝあるものに非ざらんや、

若し夫れ此秋に當りて、一朝宗教的天才の、俄然慈仁博愛の大理想に驅られて、奮然として相蹶起するあらんか、雲の龍に従ひ風の虎に隨ふが如く、滔々として滿天下の人心を風靡し、等くその法雨に濕はしむるの時あるに至らん、而かも此天才や斯かる宗教的活動の下に滿天下の人心を收攬し、衆人の渴仰を得て熾盛なる一代の教主と瞻仰せらるゝに至らんか、此宗教的天才に由りて稱道せられたる宗教上の新思想新主義は、縱令そが前代宗教思想の歴史的發達の繼承的結果たるもの多きにもせよ、その宗教的天才の偉大なる感化影響の下に、後人其宗教を呼んで以て其宗教的天才の名を冠し、以て此に初めて新宗教は創設せらるゝに至るものとす、佛教基督教の如き則ち是れなり。之れに反してその宗教的天才の人物的影響感化は之れより比較的に鮮少ならんか、縱令その採れる宗教の理論的立脚地は何かに斬新にして、殆んど前代思想を一變せしやの觀あるにもせよ、尙舊宗教の名稱の多少の變更の下に、其新宗教は呼ばれをるものとす、西洋に於ては彼の猶太の預言者 (Nabi) を初めとして彼のルーテル、カルヰン等の如き、我國に於ては傳教弘法親鸞の如き佛教各宗の開祖の如き是れに近かし、彼の

基督や釋迦や實に新宗教の樹立者たると同時に又明に前代宗教の革新者たる者なり。ルーテルや各宗の開祖や基督佛陀を祖述憲章したるものたると同時に、又明かに一新宗教の創立者なりとす。然るに釋迦や基督の宣傳せし宗教は世人之れを呼びて、佛教基督教と稱して之れを彼れ等の思想の必然的前驅を爲しをれる婆羅門教猶太教と稱せず、以て之れに禁らしむるに全然新宗教の名稱を以てせしにも係はらず、各宗の祖師の創唱せる宗教思想は之れを前代思想に比して頗る斬新なる分子の附加しをるにも關はらず、世人は尙之れを呼ぶに依然基督教や佛教の名稱を以てせしものは、諸種複雑の事狀其間に横はれるものありて存すと雖も、その宗教的天才の感化影響の多少と、當時その社會の境遇事狀の異同より成れる結果に由るものなりと謂はざる可からず。吾人は今之れを以て試みに彼のユニテリアンや自由主義佛教に比較せんか、此兩主義はその説く所教ふる所一に在來の基督教や佛教とは全然相異しをりて、殆んど之れを基督教若しくは佛教と稱する仕格無きにも關はらず、世人は尙之れをして依然としてその舊時の名稱を襲用せしめをる所以のものは、恰も彼のルーテルや各宗

の開祖がその思想の内容に於ては、之れを在來の基督教や佛教に比するに頗る徑庭しをる斬新の分子要素鮮なからざりしにも關はらず、尙之れを以て基督教と稱しをりしと同一なりとす。蓋しその人物の偉大なる能く一世を徳化するに足るものあるを以てするに非るよりは、徒らに新宗教の名を以て斬新なる思想を宗教界に創唱するも、その社會に及ぼす影響感化の比較的鮮少にして、却て之れを在來の成立宗教の名稱の下に保存し置き、之れに因縁して以てその實際的勢力を社會人心に扶植するの實益實効多きものあるが故に、宗教上の新思想にしてその人物的感化を有すると鮮少にして、その社會的事狀は尙その機縁順熟しをらざるものあらんか、寧ろそを以て新宗教として社會に打ちて出でんよりは、在來宗教の一派として社會民衆を教導するの實際に能く効果ありて存するものなり、然れば斯る理由あるが故に、彼の自由主義佛教徒やユニテリアンは之れを佛教若しくは基督教の名稱を襲用しをるものなる歟。然れど現今の如く東西の新思想は著るしき反對矛盾の分子要素を提供し來り、種々雜多なる新思想の統合上に成れる自由主義佛教の如き、明かに之れを以て一新宗教と稱

し得可き一外縁在りて存するも、尙その人物て至大なる内因に缺如せるものあるが故に、之れを以て自ら新宗教なりと名乗り出で、花々しき活戦を宗教社會に演ずるの壯舉に出づる能はざる所以なりとす。果して然らばその所謂内因とは何ぞや、曰く一大宗教的天才の缺乏是れなり、見ずや我國思想界現今の狀態はその前代宗教の腐敗化石し去りたる、基督釋迦出世前後の猶太印度の狀況に譲らず、而かもその異種雜多なる東西思想の集合し來たれる、現今我國の思想界の趨勢は亦猶太印度の昔時より尙太甚しきものあり、而かも新宗教勃興の導火は彼等ユニテリアンや自由主義佛敎徒に由りて點せられ、既に業にその思想上に新生面を開顯せられたるものあるにも關はらず、尙社會的一大勢力として社會の表面に表白し來るに至らず、彼等自由主義佛敎徒をして徒らにその忍びざるを忍びて尙彼等の一佛敎徒たるの無意義の文字を襲用しをるに終はらしむ、是れ一に我國の今日が昔時猶太印度に於けるが如く、基督や釋迦の如き一大宗教的天才に缺如しをるの致する所ならずんば非ざるなり、思ひて此に至れば今の秋に當り宗教的天才の出世は、世人の心竊かに之れを待てる實に一日千秋

も皆ならざるなり、斯かる宗教的天才の出世や實に新宗教創立の機順熟したるの時にして、斯かる宗教的天才の尙未出世し來たらざるの日に於ては、その當時に早く表白せられたる斬新なる宗教思想は之れを他日斯かる宗教的天才に附與するの好資料の豫備をなすものたるに外ならざるなり、新宗教の創設は實に斯かる宗教的一大偉人に待たざる可からざるや明かにして、斯かる宗教的偉人の出現以前に當りて、宗教上に於ける自由思想の煥發は一に是等宗教的偉人の至るを待つの前驅たるものにして、そは將來に興り來らんとする新宗教をして、その時機の順熟を待たしむるの豫備を爲しつゝあるものとす、蓋し一事業をして成立せしめんとせば、必ずや機縁の順熟に待たざる可からざるは識者の夙に之れを認めて以て疑はざる所、彼のルーテルの宗教改革も之れを彼の羅馬敎全盛時代を謳歌せる、グレゴリオ七世法王の當時に於てせば、果して如何ん、何かにルーテルが非凡の天才を以てするも、到底そを成功するの餘裕なかりしや三尺の童子と雖も亦之れを知る、而かも偶々文藝復興の後ち歐洲の思想界は活潑の生氣を帶び、寺院敎權の專恣を怒れるの時に當り、彼のテッセルなる一僧侶法王の

命を含みて獨乙國內に免罪符の販賣に従事せり、吁嗟機や熟せり時や來れり、此に於てルーテルは奮然驟起、以て羅馬寺院の教權を排して滿天下に宗教上の改革を稱道せり、是れ遂に彼れをして功を宗教改革の一大偉業に成さしめたるの近因なりとす。果して然らば苟も新宗教勃興の如き一大事業の期施せらるゝや、必ずや又内因外縁諸多の事情條件の悉く完備せるものあるを要するものなり、若し然らずして尙其機縁不熟の秋に際して、彼の自由主義佛教徒の主張せるが如き自由思想の本義真相を忌憚無く、凡俗庸衆の輩に向ひて大聲疾呼するも、大言何ぞ里耳に入らん、聽く者は超々茫然として獨り自失するあるのみ。噫、マルダノ、アルノーヤ、ミシエール、セルエヤ、フッス、ホクリップは之れが爲めに徒らに非業の最後を遂げ、空く知己を千歳に契りて火刑柱上一片の冷烟と化し去るの奇禍を買ふに終はれり、然れば今日彼の自由主義佛教徒なる稱呼が、果して吾人の嚮者に分拆解剖せし如き佛教の意味を以てしては到底無意義の語と化し去り、苟もその論理の嚴密齊合を欲せば、最早や佛教と稱し得可からざるものにして、寧ろ之を新宗教の名稱を以て呼ばざる可からざるものありて存するは、世の

識者先覺者を以て自ら任せる、彼等自由主義を奉する所の佛教徒の如きに在りては、或は既に業に疾くよりそを觀破せしものならんも、凡俗庸人の輩に在りては、現今に於ける著るしき信界の動搖に連れて、一浮一沈一上一下、尙多少從來の教權の下に盲從贊動、一に五里霧中に彷徨しつゝあるの今日に際し、自由主義佛教徒の如き進歩せる思想を以て新宗教を彼等の面前に叫ぶも、到底その解するを得ざる所、然れど今翻りて宗教の社會的方面を觀察するに、苟も宗教とし云へば凡俗に解せられず、社會の勢力と成り得ざるが如きものならんか、それは宗教としての實際的價值はその過半を滅殺せらるゝものと謂はざる可からざらん、然れば自由主義を稱道する佛教徒の如きも、其期する所は一に余の嚮者に解せし如き新宗教の樹立にあらんも、そを先づ姑く自由主義佛教徒の如き無意義の名稱の下に、彼の一大新宗教の勃興の機縁順熟し來るものあるを待ちつゝあるものに非る乎、實に今日彼の自由主義佛教徒の採りつゝある立場の如きは、一大新宗教樹立の準備としては又實に必要缺く可からざるものなりと謂はざる可からず、若し縱令そが全然稱揚し得可き最良主義に非ざるにもせよ、我邦現今の如

き思想の過渡期に際しては、斯かる主義が以て後來に繼出す可き健全なる一大新思想の大厦を建設するにその礎柱を與ふ可きものとして、又實に必要缺く可からざるの因子を成せるものとす。然れば彼れ自由主義佛教徒なるものは單に自家矛盾たる怪しき稱呼たるのみに止らずして、斯かる主義が思想の過渡期に際しては必要缺く可からざるものたるとは、是れ恰も封建制度が歐亞を問はず、何れの時代の社會にも絶對的に必要なりと謂ふに非ずして、進歩せる社會より云へば寧ろ斯かる制度は不必要なるものなるにも係はらず、西洋も日本も一度は必ず社會發達の順序上、封建制てふ社會的階段を經山し來たりたる所以のものは、今日に發達進歩せる社會を現出するには封建制なるものは先づその必然的要件、即ちヘーゲルの所謂止揚契機を成ししものにて、此點に於て吾人は充分封建制の眞價を認めずんばあらざるなり。今又是れと同く自由主義佛教徒なる名稱も、思想の進歩せる吾人に採りては最早無意義にして、彼等が依然佛教徒なる名稱を慣用しをるは、頗る奇異の感ありて存するを見ると雖ども、苟も今の時に當りて一大新宗教の樹立を企畫し、斯かる新宗教に由りて實際的に社

會の勢力として以て世道人心を救濟せんと期せば、その豫程準備として自由主義佛教徒なるもの、現出も、亦必ずや人心の一度は當さに經過せざる可からざるの階段たる可きなり、見ずや、彼の媒介神學者風の口吻を摸せる媒介的佛教徒なる者の思想は、今日彼の自由主義の佛教者に取りては殆んど一顧の價値無き者として、之れを過去の歴史中に葬り去る可きものなりと雖も、其媒介的佛教徒の所説も、又元來彼れ等自由主義佛教徒の自由思想の由りて生れ出でたる母たるの所以を思はば、彼れ自由主義の佛教徒に執りては、彼れ媒介的佛教徒の思想は必然的に至要なる因子たるを了知し得らる可きなり。斯くの如く今日所謂佛教の自由主義のごときも、實に將來更らに大に一大新宗教を樹立せんとするに當りて、吾人思想の必ずや一度は當さに經由せざる可からざる思想の歷程序次なりとせば、今の時に當りて吾人は又斯かる自由主義佛教徒の取れる自由思想の必然にして至要なる表現なるを是認せずんばあらざるなり、唯吾人の冀ふ所は、一日も速かに彼等自由主義佛教徒をして忌憚無くその平素懷抱しをれる宗教主義を公然社會に發表し充分なる社會公衆の歡迎と満足とを得るあるの

日に到達せんと期するに在り。然れど社會一般の人智や案外にもその程度低きものにして、人文の進歩は貧富の懸隔をして熾んならしめたるが如く、人民智識の差をして益盛んならしめ、ハートマンも其宗教哲學に於て公言しをらるゝ如く、今日にては學者と凡俗との智識にはその懸隔頗る大なるものありて存し、少くとも二三百年も相隔りをるものなれば、學者の思想をして民間に勢力を得しめんとするが如きは、頗る困難なるものありて存するは又疑ふ可からざるの事實にして、今日吾人の採れる宗教主義も、その現實を實際の社會に見るを得るの日に至れば、科學は更らに今日より幾層高等なる進歩の階段に在りて存し、恰も今日吾人が在來の諸宗教に對して兎角の批評を加へざるが如く、當時の科學は今日吾人の採れる宗教思想の不備を批判評議し、その不備を指摘しをるの日に到達しをる可し、果たして然らば今日吾人が採れる宗教思想の現實にせられて、實地に其勢力を社會に扶植するに至るの時は、吾人は實に苔蒸せる墳墓の下に在りて、其永劫の眠に就きをるの日ならざる可らず、而て吾人の見孫に至りて初めて其父祖たる吾人の經營慘怛せし宗教思想の實現をして社會に表現せ

しめ得るの時期に接着するに至る可きなり、若し夫れ現今に於ける彼の頑迷不靈の一派俗僧か宗教法案や公認教問題を以て、その愚俗を煽動するや、今日尙東本願寺が其の勢力の扶植地たる加越の愚民は、水盃を酌みて父母妻子と永訣し、竹鎗席旗を推し樹てざるばかりにて、隊伍を組み、上京し來るが如き、盲信尙其勢力を社會の一部に逞うしつゝあるを見れば、吾人の所謂健全なる新宗教の樹立も、現今に在りては尙未だ學者の『ユートピア』たるに止る乎非乎噫、覺えず筆を投じて長嘆息するもの三たび。

第七節 宗教と教育及び政治

佛教にまれ基督教にまれ、宗教が教育政治の兩社會より疎外視せられをるは、東西古今の別なく、今日我邦の現況よりも太甚しきは未曾て是れ非る可し、是れ果して宗教家その人の罪なるか、將た又教育家及び政治家その人の罪なるか。抑も吾人を以て之れを見るに、明治の初に於て我邦既存の宗教として歴史的に發達し、相當の形式を以て行はれをりし所のものは、佛教なりとす、然かるに皇政復古の氣焰漸く熾んなるに至りしより、万事神武の舊事に復古せんとして、排佛毀

釋の呼聲極めて高く、寺を毀ち僧尼を還俗せしめ、寺領は一切之れを官沒し、梵鐘を改鑄して大砲となし、以て外寇に當り四夷を攘はんとせしことさへありしかば、佛教の勢力は頓みに挫折衰頽を來し、今日に至りてもその餘響の及ぶ所、寺院はその子弟をさへ教育するの資を缺くもの頗る多きが如き、佛門に取りては容易ならざる由々しき不幸を醸生し來たるに至れり。然れば現今の佛教が社會の先覺者指導者となりて、世道人心を感化するの勢力に缺ける、亦強ち之れを彼等僧侶の無能にのみ責む可きに非らず、當時の爲政者及び社會は大にその責任を免る可からざるもの、換言すれば當時の爲政者及び社會はその社會人心の缺く可からざる精神上の『アンプロシア』を與ふる佛教そのものを、自ら目して不用物と做し、その扶植の根を斷ち繁茂せる幹を伐殺せしものと謂ふ可く、その結果今日に至りては自らその缺く可からざる精神上の滋食に缺乏し來たり、世道人心は日に衰頽に歸し去らんとするに了りしなり。然れば現今我國に於ける世道人心の頹敗、宗教(佛教)の無勢力を致したるは、單に國家社會の上より觀察すれば、日本の社會及び爲政者が自ら招けるの禍なりと謂はざるべからざるなり、

彼れ等が宗教に無頓着にして宗教の智識に乏しき、維新以來排佛毀釋の餘響を蒙れる、今日尙宗教なるもの、眞意義を解してその正鵠を失はざるものに至りては、彼の滔々たる爲政者教育家中果して幾人かある、彼等の宗教上の智識に乏しく、苟も宗教と云へば、佛教を問はず基督教を論せず、食はず嫌ひにも一概に皆之れを排斥し去りて、教育上の修養とは何等の關係無きもの、如く考へ、又現今我國の佛教基督教共にその無勢力なる、教育上に殆んど寸効無きの觀あるよりして、彼等施政者教育家は全然宗教は教育上に何等の補益も無きもの、如く思惟し、宗教を教育上より全然度外視し去らんとするの傾向あるに至れり、勿論彼等が今日教育と宗教とを截分せんとするは、我邦の如き國力尙微弱なるものありて、對外政略上若しも佛耶兩教の教育上に於ける葛藤紛紜を將來に醸出するが如きとあらば、彼の基督教の外國公使等の後援ある、彼れ等より何かなる難義を申し込まるゝやも未俄かに知る可からざるものあり、若し斯かる事あるときは國家の不利益なりとの思想より來りしものも、亦その一理由なりしならんか、然れど之れを要するに教育上に排宗教的思想を涵養し、教育上に宗教を全く度

外視したるは、現今の教育家爲政者なるものが宗教そのもの、智識
 致す所の結果たらずんば非ず、吾人は固より佛教なり基督教なりを以て、現今の
 教育に實地適用せよと説くものに非ず、其所謂今日の佛教や基督教や吾人の嚮
 者に既に論明せるが如く、到底進歩せる吾人の精神をして満足せしむ可くも非
 ず、加ふるに彼等宣教者輩の腐敗墮落無氣力無勢力にして、吾人は實に彼等が世
 道人心に殆んど寸効無きを斷言せざんば非ざるなり、然れど現今の佛教基督が
 何に吾人の進歩せる精神的需要を満足する能はざるに至りしとは云へ、之れを
 排斥すると同時に、之れを以て直ちに宗教そのものも全然教育上には不必要な
 りと説く者あらば、吾人は大にその非を鳴らさざる可らず、何んとなれば吾人の
 嚮者に既に論明せるが如く、宗教なるものは人文史上の一大現象にして、同一人
 性の必然より生成發達し來たりたる所のものなれば、宗教が吾人々生に缺く可
 からざるは恰も言語か吾人々生に須要缺く可からざるが如きなり、是れ健全な
 る宗教が實際上には吾人の道徳上に影響感化を及ぼすこと頗る多く、理論上は
 吾人の精神全軀に満足を與へて安心立命の礎たらしむるものは實に宗教そ

のもの、本色なればなり。健全なる宗教思想が吾人々生に一日も缺く可から
 ざる精神上の『アンプローション』なること夫れ斯くの如し、然るに彼等教育家なる
 ものがその宗教上の智識に乏しき、現今我國に於ける佛耶兩教の腐敗頹壞を見
 て直ちに宗教なるものは斯かる無用の長物なるかと速断し、忽ち宗教そのもの
 をも擧げて之れを棄却し去り、倫理教育を以て之れに代へんとさへ企つる者あ
 るに至る、愚論も亦甚しからずや、彼等は發達せる宗教が道徳と密接なる關係に
 於て立ちをるを一見し、而て人世に道徳の必要なるを目撃するより、成立宗教に
 して既にその無氣力無勢力なる、我が世道人心に何等の感化を與ふること能は
 ざらんか、宜く倫理教育を以て之れに更ふべし、是れ吾人の道徳心を涵養して、實
 際の社會に役立たしむるは、倫理教育より先きなるは無ければなりと。此議論
 の如きは吾人精神の全生命を擧げて道徳のみなりと爲し、善意識は吾人の全意
 識を爲すものなりと假定せるの議論にして、吾人の精神には善意識の外かに、更
 らに真意識美意識のある在りて存するを悟らざるの謬見たるに職由するもの
 なりとす、吾人の精神は善意識を有しをると同時に、美意識をも包有し、真意識を

も包含す、換言すれば吾人の精神は智情意の三者より成る、然るに此三者中その一をのみ偏重するが如きは未完全なる議論と認むる能はざるものなり、然るに宗教なるものは吾人の嚮者に論明せるが如く、智情意全軀の平衡均準上より成れる、究竟的合理的の證信なるが故に、それは吾人の善意識を満足さすると同時に、美意識や真意識をも併せて之れを満足せしめざる可からず、故に論者の説くが如く、苟も吾人の精神にして單に善意識のみより成る者たらば、倫理教育至上主義を主張し、宗教の如きは人物陶冶を目的とする教育上より全く除却し去るも毫も不可なると無く、却りて斯く爲すこそ至當の所置とや云はん、然れど吾人の精神にして苟も智情意全軀より成るものとせば、斯かる所論は心理學の研究を蔑如したる非科學的斷案なりと謂はざる可からざるなり。斯く云ふときは論者更らに謂はん、曰く彼の道徳なるものは吾人の智情意全作用より成るものにして、決して子の想像するが如く意志作用のみより生成し來るものに非ず、然れば徳性涵養即ち倫理教育を以て子の所謂宗教に代ふるも、又以て能く吾人の全精神を満足して丁度子の主張する所と同一の結果を得ること、子の所謂宗教な

る者が吾人の全精神を満足せしめ得ると謂ふに同一なるに非ずやと。然れど此くの如き議論は吾人の所謂宗教なるもの、眞意を誤解せるの致す所なりと謂はざる可からず、吾人の所謂宗教なるものは究竟的合理的證信にして、即ち一種の哲學なり、然れど吾人日常の行爲道徳上の法則を規定する倫理は倫理科學研究の結果より來たれるものなり、然れど實際上に倫理を説かんとするにも又た倫理科學の研究を大成せんとするにも、必らずやその究竟する所、哲學の範圍内に入り來らざる可からず、而てその哲學とは取りも直ほさず吾人の所謂宗教そのものたるに外かならざるを以て、倫理教育は彼の倫理科學が哲學に負ふと同一の意味を以て、健全なる宗教に負はざる可からざるや燎々乎して火を見るより明かなる事實なりとす、換言すれば倫理教育を大成せんとせば、その究竟する所必ずや宗教に依らざる可からざるものとす、矧んや現今所謂科學的に組織せられたる倫理學を唯一根據として、倫理教育を完成せんと企て、此立脚地より教育は倫理教育のみにて足れり、宗教の如きは眞個に無用の長物なりと説くものあらば、科學を以て哲學に代へんとするに同く、その思想の淺薄なる實に慙笑

に堪へざるなり、然れば倫理教育なるものを以て單に倫理科學の上に成れる倫理教育として之れを考ふるも、又倫理科學の規定せし法則を教ふる上に、更らに一步進みて哲學の範圍に入りて教授井上博士の所謂先天内容の聲を説き、人生の機微に迄觸れしめんとするにありても、等しく吾人の所謂宗教なるものに負はざる可からざるや明かなりとす、何んとなれば科學としての倫理が、哲學の範圍内にある、否な哲學そのものたる宗教に負はざる可からざるは、今更ら論する迄も無く、その倫理教育の大本基底を説きて、聽者をして倫理の究竟地を獲得せしめんとせば、儒教の天道、佛教の因果、陽明の良知、基督の神、カントの無上命令、井上博士の所謂先天内容の聲を説かざる可からず、然れど苟も吾人にして一たび之れを説くの秘機に觸れんか、それは既に業に吾人の所謂健全なる宗教なるものにして、倫理教育は實に此點に至りて止住す可きもの、又此點に迄至り達せざれば吾人は到底全精神の満足を得る能はざるものとす、是れ余の完全なる倫理教育には健全なる宗教思想を必要とすと説く所以にして、彼の倫理教育中には宗教なるものを省きて之れを容れざらんとするも、苟も吾人の人類たる以上は到

底その能はざる所のものとす、何んとなれば宗教は吾人々性の必然的需要を充たさんが爲めに生成し來たりたる所のものにして、而かも吾人全精神の満足を期する所のものなり、果たして然らば彼の健全なる宗教は教育上には必須缺く可からざるの要具たるを知る可きなり。斯く云ふときは論者は復更らに反問して謂はん、曰く子の所謂宗教なるものは倫理教育の究竟地として必要なるは我れ之れを了す、然れど斯かる宗教は何かなる儀式的表現の下に之れを教ふ可き乎と、吾人は之れに答て云はん、吾人の所謂宗教なるものは祈禱禮拜の如き、今日最早や陳腐となりたる具體的既存の成立宗教の儀禮を襲用するを須あらず、吾人の宗教なるものは即ち精神の宗教なり、之れを宣傳する必しも某々の具體的儀式に由るを本とせず、此點に於ては倫理教育道德修養の方法と毫も異なる無きなり、斯くの如く吾人の所謂宗教なるものは一切具體的の儀式に由るを必とせずと雖も、それは姑く學校に於ける倫理教育の上に就いて説を立てたるのみ、若し學校に於ける倫理教育上の所談に非ずして、單に宗教として人民一般に向て之れを宣傳弘通せんとするときには、現今の進歩せる智識信仰の眼光を以て、す

毫もその心に疾しからざる一定の儀式を制定して、之れを用うるも亦決して妨
 げざるものとす。之れを要するに健全なる宗教が吾人の倫理修養上に一日も
 缺く可からざるの要具たるは、吾人の以上論明する所を以て約明瞭ならしむる
 を得たりと信ず、然るに現今の教育家動もすれば佛耶兩教の教育上に於ける衝
 突を見て、海外諸強國の交渉を來さんことを恐るゝの爲政者に使嚇せられ、加ふ
 るに維新以來排佛毀釋の精神既に業に成りをりし餘響と、基督教が外國新來
 の宗教にして我國風に同化せざるより、一時基督教の外國思想が我國固有の思
 想と衝突し、國體上頗る危険なるものなるを憂懼すると、是等成立宗教が實際上
 今日最早や吾人の精神を満足さするの能力無く、從て世道人心に何等の良感化
 をも與ふると無きとを見て、彼等が宗教上の智識に缺如せる、乃ち宗教そのもの
 を以て又全然斯くの如きものなりと速了し、宗教は教育上に有害無効なるもの
 と獨斷し、排宗教的態度を以て、切角將さに宗教思想の萌芽を發しつゝある被教
 育者に接す、被教育者の宗教的精神の發達、換言すれば吾人精神の至重至要なる
 一因子たる、宗教思想の發達進歩を妨害する豈に之れより太甚しきものあらん

や彼の職に教育に従事せる人は、須らく戒心省慮す可き事となす、而て吾人は世
 の所謂教育者なるものに向て以上の注意を與ふると同時に、彼等が多少なりと
 も自ら宗教上の智識を得ることに力められんことを希望せずんば非るなり、何
 んとなれば吾人が教育上宗教なるものゝ何かに重要なるかを識知悟了せん
 は、吾人は先づ宗教なるものに關する吾人の智識を要すればなり、知らず世間の
 教育家なるもの能く自ら進みて宗教の書を繙くの勇氣ありや否や。
 既に宗教なるものが教育上一日も忽諸に附す可からざるの要具たるを知らば、
 政治上亦宗教の重大なる所以を推知し得可きなり、則ち上來既に論明せるが如
 く、今日日本の成立宗教は到底物の役にも立たざれども、元來宗教なるものが世
 道人心に影響するの大なる所以を知らば、爲政家亦須らく之れを以て爲政上常
 にその思想中より脱却せしむ可からざるものたるを知る可し、然ればこの點に
 關して苟も爲政家なるものは宗教に關する智識を要すること更らに教育家其
 人と毫も異なること無し、宗教と國家との關係問題の如きは吾人眞に之れを科
 學的に虚心平氣に之れを考覈闡明せんことを希望して止まざるものなり、然れ

ど我國現今の爲政家なる者は果たして能く眞面目に這般の天職を全うし得るか、今宗教を以て之れを政治上より觀察し來るときは、我國の如きは其憲法規定の範圍内に於て、各自信仰の自由を許され、濫りに自家所信の宗教に干渉せらる可きに非ず、何かなる宗教にも各自其自由を與ふ可きものとす、然れど國家は其國家と特別の關係を有せる宗教に對し、その特別の關係あるの點よりして特別なる取扱ひを爲すや固よりその所とす、而てその宗教と國家との關係が單に歴史的に存在しをりしと云ふに止らずして、現今に於ても國家はその宗教と國家統治上離る可らざるの關係ありとせんか、國家が斯かる宗教を憲法規定の範圍内に於て、出來得る限り殊遇するは、又その國家がその宗教を優遇すてふ、單に寛大の精神に出づるのみならず、又國家が自家保存上極めて必要なることにして列國對峙の今日に在りては、國家は之れを避けんと欲するも到底その能はざる所のものとす。例之ば今此に日本に於て最も時世に適合し、個人としての人民の道徳上には勿論、國家團結の上にも、一日缺く可からざる一個良好の宗教の存在しをるあらんか、國家は斯かる宗教に向て、その憲法規定の範圍内に於て、特別

の殊遇を與へ、その宗教の益々發達長育せんことを企圖し、斯かる宗教保護の爲めに國家は相當の金額を下附するは、是れ國家が自衛上自ら進みて決行せざる可からざる所のものにして、是れ尙ほ國家が年々莫大の金額を消費して、戦備擴張に汲々しをると一般なりとす、若し果たして斯かる良好の宗教にして存在しをらんか、宗教家は敢て自ら進みて以て國家の特別待遇を求めずして、却て退いて之れを謙辭せんとするも、國家は諸有便益を該宗教に與へ、以てその發達長榮を企圖せざる可からざるや勿論なりとす、何んとなれば斯かる宗教の發達長榮を謀るは、取りも直ほさず國家が國家自身の存榮を計ると一般なればなり、試みに思へ今斯かる宗教の教師にして、人民に向て一場の説教を爲すや、その人民は直に之れに由て敵軍万馬の間に出沒し、水火も恐れざるの勇氣を振起し得ること、多年軍隊内に於て士官訓練の下に彼等を養成するより數倍の功果あらんか、國家は軍隊設備費の一部を割きて斯かる宗教を保護するの費用に充つるを吝まざると、尙今日我邦の古社寺が、國家と歴史上の關係あるが故に、その保存に國家が年々幾多の費用を寄捨しをると一般、國家は今日實際その自衛上より喜ぶ

て斯かる宗教の殊遇を實行す可きなり、嗚呼現今の我國に於て斯かる國家に鴻益ある宗教は夫れ何れの所にか是れ之れを求めん、其れ何れの所にか是れ之れを求めん。佛教基督教共に其無能無勢力にして、何等民心の反感化を與ふる能はざると我國の今日より太甚しきは未だ曾て是れ非るなり、敗倫不徳は世の神聖視する教會や圓顧の社會に却て多きに非ずや、嫉妬讒誣陷摺結托賄賂阿諛等に於ける成立宗教に對し、國家は自衛上一も斯かる殊遇を與ふるの要無きもの、然れば今回第十四議會に提出せられたる宗教法案の如きは、國家は大膽に於て現時の諸宗教を統率する所の適當なる方と法云はざる可からず、特に佛教が今日既に老朽事に堪へざるに至れりしも、多年歴史上に我國躰と離る可からざる關係ありし之故を以て、夫れ相應の殊遇法あるものなれば、苟も佛教徒にして能く自家の本分を知りざるものならんには、公認教請願の如き僭越なる運動は自ら差し引かへざる可からざるものなるに、徒らに口に過去佛教の歴史を繰返へして、自己の祖先が過去に勳功ありし之故を以て、無能彼れが如き現今の佛

教に向て厚顔ましくも、特別なる殊遇を與へよと喚ぶ、是れ恰も譜代の臣下がその主家に盡し、我か祖先の勳功を算へ立て、以て法外なる要求を其主家に強訴するが如きなり、人誰れかその不條理を惡まざらん。國家は曰く、國家は汝等祖先の勳功を賞せんが爲めに、過去に於て既に國家はその祖先に寺領位階等與ふるに特別の恩遇を以てせり、若くは現今も尙汝等祖先の功勞に酬ゆるの意を以て、相當の賜賚は汝等の如き無氣力無能者に向ても、國家は年々之れを爲せるに非ずや、之れをしも是れ思はずして、更らにその上に分外の非望を顯視す、國家は統治上其安寧を保たんが爲めに、是等分外の強請を爲すものを所罰せざる可からずと。彼の所謂公認教運動の如きは、畢竟國家は斯かる最後の判決所分を施さざる可からざるものとす、吾人の見る所を以てすれば、眞に佛教にして現今の世道人心に缺く可からざる精神上の『アムプロシヤ』を與へ、佛教にして若し國家統治上日本現今の社會に必須缺く可からざるものならんか、その希ふ所は求めずして自ら至り、思はずして之れを得可く、國家は又國家の統治上自家保存の原則上、到底斯かる良好の宗教の保護を不問に附し去る能はざるものとす、然

れば佛教徒は徒らに公認教運動の如き、卑劣頑迷なる政治熱に浮かされて、有害無益の事業に狂奔せんよりは、退いて自らその信念の基礎を固め、その道徳を修養し、純粹清淨なる佛陀の福音を社會に宣布して、その宗教家たるの本分を悉くす可きなり、斯くせば佛教は世道人心に影響感化するの偉大なる、縱令法律上の公認教たる能はずとするも、能く事實上の公認教たるを得可きなり、是れそは眞に神聖なる精神界の事業に従事せる、佛陀正化の宣流者として、精神界最後の勝利者として、宗教界の健闘者として、否々寧ろ宗教界に於ける無形の君主として、精神界に於ける無冠の帝王として、社會人心の皈依尊信を得、以て眞正なる佛弟子たるの本分を盡くし得可きものとす、見よ佛教の開祖たる釋迦は眞理の愛求者、布宣者として自ら万乗の尊を捨て、帝位を見ることが尙敝履を脱するが如く、一介の乞丐僧即ち沙門牟尼となりしに非ずや、然るに末代無智の佛教徒は人爵に熱衷し、紛々たる俗的政治家者流の膝下に哀願し、愚民の迷信に乗じて一揆的運動を煽動し、之れに由りて自ら公認教として政治上に俗權を張らんと狂奔す、彼等若し退いて半夜人無きに當り、獨坐冥想靜思内省し來らば、その衷心竊に自

家の教祖教主に對して厚顔慥怩たる所無きか、然れば縱令彼徒が目的とせる公認教なるものが、果して能く成功し得るとするも、そは斯かる根本的腐敗の陋手段に由りて得たるの結果なれば、そは佛教をして興隆せしむる所のものに非ずして、却てそを死滅衰亡せしむる最後の一月たらずんばあらず、余は今や本節を終はらんとするに當りて、昨年五月、ストラスブルヒ大學の哲學教授チーヒラー氏が、その總長の就職式に於て講演せし信仰と智識 (Wissen und Glauben) と題せる論文中の數語を引抄して、以て自ら宗教の神聖を俗權の庇保に汙さんとするの凡衆を誡めん、是れ大に余の意を得たるものあればなり。

氏曰く、宗教は動もすれば則ち卑屈にも自己の勢力を張りて以てその論敵たる科學を壓倒せんと圖り、その應援を外的俗權に藉ると屢々なるは苟も史を繙く者は何人も記憶しをる事實なり。然れど情々之れを考ふるに、斯くの如きは畢竟宗教其のものに資するに非らずして、却りてそを殘害するものなりと謂はざる可からず、何んとなれば信仰は全然心靈的內的眞理にして、外的俗權の能く左右し得る所に非らず、然るに信仰にして一朝その保護を外的俗權の下に請ふが如

きとあらんか此一事以て宗教なるものは自ら進みてその純乎たる自己信仰の
 靈火を擧げて、一に之れを俗權の蹂躪に委し、之れに由りて神聖なる宗教は自ら
 下界に墮落し去るものなれば、是れ豈に眞に信仰の泯亡に非ずして何ぞや、是れ
 豈に眞に宗教そのもの、覆滅に非ずして那ぞや、然れば宗教も亦科學と同く、苟
 も能く世道人心に資する所あらんとせば、必ずや當さに自家の本分を嚴守し、眞
 理を以てその生命と爲し、全然自由なる生涯を求めざる可からず、斯くの如くに
 して始めて宗教そのものは自己の本性眞面目を發揮するを得可く、萬人の尊信
 得て博するに至る可きなり、故に曰く吾人をして自由ならしむるものは眞理な
 り、吾人をして眞理ならしむるものは自由なり、翅、眞理と自由とのみ之れを能
 くすと。

宗 教 新 論 終

索引

(イ) 及び (井) の部

イन्द्र	因陀羅	Indra.
イオーニア	Ionia,	Ionia.
井クリフ		Wyclif.

(ロ) の部

ロカーヤタ	順世	Lokâyata.
ローテ		Rothe.
ロック		Locke.
ロジャール・ベーコン		Roger Bacon.
ロバートソン・スミス		Robertson Smith.

(ハ) (バ) 及び (バ) の部

ハックスレー		Huxley.
バウルゼン		Paulsen.
ハートマン		Hartmann.
パレスチナ		Palästina.
パルメニデース	Παρμενίδης,	Parmenides.
パウルス		Paulus.
バプア		Papua.
ハーマン		Hamann.
ハーダー		Herder.

(ニ) の部

ニールゼン		Nielsen.
ニュートン		Newton.
ニーチェ		Nietzsche.

(ホ) 及び (ボ) の部

ホメーロス	"Ομηρος,	Homer.
ホッブス		Hobbes.
ホッテントツ		Hottentots.
ボナベンツラ		Bonaventura.

(ヘ) (ベ) 及び (ベ) の部

ヘルバート		Herbart.
ヘルマン		Hermann.
ヘレネー	"Ελένη,	Helena.
ヘルムホルツ		Helmholtz.
ヘーゲル		Hegel.
ヘーラクライトス	"Ηρακλειτος,	Herakleitos.
ヘーシオダス	"ΗΣίοδος,	Hesiod.
ヘーロドトス	"Ηρόδοτος,	Herodot.
ヘーラクレス	"Ηρακλης,	Herakles.
ベルナルツス		Bernardus.
バイル		Bayle.
ベッシュェル		Peschel.
ペルソイス	Περσεύς,	Perseus.
ペトロニウス		Petronius.

(ト) 及び (ド) の部

トルストイ		Tolstoi.
トーマス.アキナス		Thomas Aquinas.
トーマス.チャップ		Thomas Chubb.
ドヤウス.ピタール		Dyaus-pitar.

(チ) 及び (ヂ) の部

チーホラー		Ziegler.
チャールス.ダーフィン		Charles Darwin.

ヂエダネス.レルチウス		Diogenes Laertius.
チャールズ.カ	斫婆迦	Charvaka.

(リ) の部

リップート		Lippert.
リッチェル		Ritchl.
リール		Riehl.
リカルツス		Ricardus.

(ル) の部

ルードラ	樓陀羅	Rudra.
------	-----	--------

(オ) 及び (オ) の部

オーケアノス	"Οκεανός,	Okeanos.
オーギュスト.コムト		August Comte.
オリュムボス	"Ορυμπος,	Olympos.
タルフ		Wolf.
オルフォイス	"Ορφεύς,	Orpheus.
オイエーメロス	Ευήμερος,	Euemeros.
オッカム		Occam.
オリゲネス		Origenes.
オリュムピア	"Ολυμπία,	Olympia.

(ワ) の部

ワルナ	婆樓那	Varuna.
ヴユ	婆由	Vayu.

(カ) 及び (ガ) の部

カール.ハーゼ		Karl Hase.
カール.コーニル		Karl Cornill.
カルギン		Carvin.
カピラワツ	迦比羅城	Capilavatthu.

カボ.ヴェーデ
カフタン
カント
カルヴァール
ガヤー
ガリレオ
カリエル

迦耶

(タ) の部

タレース
タイラー
クイッヒミュラー
ダナー

Θαλής,

Δανάη,

(レ) の部

レギュー
レイモンド.ルルス
レッシング
レーイング

Réville.
Raymond Lullus.
Lessing.
Laing.

(ソ) の部

ソークラテース
ソローン
ソーセイ

Σωκράτης,
Σόλων,

Sokrates.
Solon.
Saussaye.

(ツ) 及び (ヅ) の部

ツラツストラ
ヅンス. スコツス
ツェラー

Zarathustra.
Duns Scotus.
Zeller.

(チ) の部

ネラーンジャラー

尼連禪河

Nerânjara.

Cabo Verde.
Caftan.
Kant.
Carwar.
Gayâ.
Galileo.
Carrière.

(ナ) の部

ナザレ
ナイト

Nazareth.
Knight.

(ラ) の部

ラッド
ライブニッツ
ランケ
ラベソン
ラクタンチウス
ランゲ
ライマルス
ラッツェル

Ladd.
Leibnitz.
Rauke.
Ravaisson.
Lactantius.
Lange.
Reimaror
Ratzel.

(ム) の部

ムハメッド

Muhamed.

(ウ) 及び (ウ) の部

ウシャス
ウダカ
ウント
ウマアソ

烏師舍
鬱頭藍

Ushas.
Uddaka.
Wundt.
Houzian.

(ノ) の部

ノヴリス

Novalis.

(ク) 及び (グ) の部

クレーター
クラーク
クラウゼ
クロイソス
クセノフオーン

Κρήτη,

Κροῖσος,
Ξενοφῶν,

Krete.
Clarke.
Krause.
Krösus.
Xenophon.

グレゴリオ	Gregorio,	Gregor.
グロスゼントル		Grosventre.

(ヤ) の部

ヤーエー		Yahweh.
ヤッハマン		Jachmann.
ヤコビー		Jacobi.

(マ) の部

マルコ. ポーロ		Marco Polo.
マドレーヌ		Madelaine.
マックス. スチルナー		Max Stirner.
マン. ド. ビラン		Meine de Biran.
マックスミュラー		Max Müller.
マスリウス. サピヌス		Masurius Sabinus.

(ケ) 及び (ガ) の部

ケーニヒスベルヒ		Königsberg.
ゲーテ		Goethe.
ゲルランド		Gerland.

(フ) (フ) 及び (フ) の部

ファエトーン	Φαέθων,	Phaethon.
フォイニケー	Φοινίκη,	Phönicien.
フリーマン		Freeman.
フランシス. ドレーク		Francis Drake.
フーム		Hume.
フランシス. ベーコン		Francis Bacon.
フィヒテ		Fichte.
フィローン	Φίλων,	Philon.

フューゴー		Hugo.
フロシムマー		Froschammer.
ファウスト		Faust.
フォイエルバッハ		Feuerbach.
ブフマン		Buchmann.
ブッシュメン		Bushman.
ブライントン		Brinton.
ブラッドレー		Bradley.
ブラガバチー		Pragapati.
ブラトーン	Πλάτων,	Platon.
ブシェー		Pouchet.
ブローチノス	Πλωτῖνος,	Plotinus.
ブライデラー		Pfleiderer.
プランク		Planck.

(コ) の部

コリンズ		Collins.
------	--	----------

(エ) 及び (エ) の部

エーバー		Weber.
エルハウゼン		Wellhausen.
エオース	Ἔως,	Eos.
エツラ		Ezra.
エムペドクレース	Ἐμπεδοκλῆς,	Empedokles.
エピクローソス	Ἐπίκουρος,	Epikur.
エックハルト		Eckhart.

(テ) 及び (テ) の部

テルツリアヌス		Tertullianus.
テート		Tait.
テヅ	提婆	Deva.

デモクリトス	Δημόκριτος,	Demokrit.
デルフォイ	Δελφοί,	Delphi.

(ア) の部

アヂチー		Aditi.
アグニー	阿姑尼	Agni.
アラン.メンシース		Allan Menzies.
アバス		Apas.
アンドAMAN		Andaman.
アラ-ラカーラ-マ	阿羅藍迦藍	Alarakâlâma.
アラ-		Allah.
アエロエス		Averoes.
アヂッケス		Adickes.
アリストテレーズ	Ἀριστοτέλης,	Aristoteles.
アンチステネース	Ἀντισθένης,	Antisthenes.
アナキシマン드로ス	Ἀναξίμανδρος,	Anaximander.
アナキシメネース	Ἀναξιμένης,	Anaximenes.
アレキサンドライア	Ἀλεξάνδρεια,	Alexandria.
アウグスチヌス		Augustinus.
アタナシウス		Athanasius.
アレキサンダー. オブ. ヘルズ		Alexander of Hales
アンセルムス		Anselmus.
アイヒホルン		Eichhorn.
アポローン	Ἀπόλλων,	Apollon.

(サ) の部

サンダ		Sunda.
-----	--	--------

(キ) の部

キッド		Kidd.
キケロ		Cicero.

(ミ) の部

ミスリー		Misourri.
ミトラ	密多羅	Mitra.
ミレートス	Μίλητος,	Milet.

(シ) 及び (ジ) の部

シュルツ		Schurtz.
シャフツベリー		Shaftesbury.
シャトー. アリアン		Chatteau Brind.
シェキスピア		Shakespeare.
シュルツェ		Schultze.
シッダッタ	悉達	Siddhattha.
シュリング		Schelling.
ショーペンハアー		Schopenhauer.
シュミット		Schmidt.
シュライエルマッヘル		Schleiermacher.
ジョン. ラボック		John Lubock.
ジョセフ. ド. メストル		Joseph de Maistre.
ジョン. トランド		John Toland.

(ピ) の部

ピュタゴラス	Πυθαγόρας,	Pythagoras.
ピンセル. ナブ. パレルモ		Pinser of Palermo.
ピールゾン		Pierson.

(モ) の部

モーゼ		Mose.
モルチレー		Mortiller.
モンシニョル. サルバド		Monsignor Salvado.

(セ) 及び (ゼ) の部

セクレタン

Secretan.

ゼーレン・キールケガード

Sören Kierkegaard.

(ス) の部

スフィントン

Swinton.

スルヤ

蘇利耶

Sruya.

スバドラ・ビクシュ

Subhadra Bhikshu.

スペンサー

Spencer.

スチュアルト・ミル

Stuart Mill.

スタンレー

Stanley.

ストア

Στοά,

Stoa.

スピノーツァ

Spinoza.

スツッケンベルヒ

Stuckenberg.

ストックル

Stöckl.

スコツス・エリゲナ

Scotus Erigena.

ストラウス

Strauss.

明治三十三年八月十七日印刷
明治三十三年八月二十日發行

定價金壹圓

不許
複製

著者 加藤 玄智

發行者 大橋 新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 佐久間 衡治
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 秀英舍 工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
株式會社

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

全部
壹百部
定價

●(並製) ○壹冊金卅五錢 ○六冊金貳圓 ○拾貳冊金參圓八拾錢
○廿五冊金七圓五拾錢 ○五拾冊金拾四圓五拾錢 ○百冊金廿八圓
○郵稅壹冊八錢
●(上製) ○總クローヌ金字入 ○壹冊金五拾錢 ○六冊金貳圓八拾
○拾貳冊金五圓四拾錢 ○廿五冊金拾圓八拾錢 ○五拾冊金廿壹
○拾貳冊金四拾圓 ○郵稅壹冊拾錢 ▲御注文ハ總テ前金ノ事

帝國百科全書 既刊目次

帝 國 百 科

一	世界新文明史	高木謙吉	二十九
二	日本新地理	佐藤理學	二十一
三	東洋倫理學	木村應太郎	二十一
四	西洋倫理學	木村應太郎	二十一
五	宗教學	高木謙吉	二十二
六	新製算術	高木謙吉	二十三
七	農業學	佐藤理學	二十四
八	支那新製地學	佐藤理學	二十五
九	萬國新製地學	佐藤理學	二十六
十	農業學	佐藤理學	二十七
十一	論理學	高木謙吉	二十八
十二	栽培學	高木謙吉	二十九
十三	植物學	高木謙吉	三十
十四	新法地質學	高木謙吉	三十一
十五	新法地質學	高木謙吉	三十二
十六	新法地質學	高木謙吉	三十三
十七	新法地質學	高木謙吉	三十四
十八	新法地質學	高木謙吉	三十五
十九	新法地質學	高木謙吉	三十六
二十	新法地質學	高木謙吉	三十七
二十一	新法地質學	高木謙吉	三十八
二十二	新法地質學	高木謙吉	三十九
二十三	新法地質學	高木謙吉	四十
二十四	新法地質學	高木謙吉	四十一
二十五	新法地質學	高木謙吉	四十二
二十六	新法地質學	高木謙吉	四十三
二十七	新法地質學	高木謙吉	四十四
二十八	新法地質學	高木謙吉	四十五
二十九	新法地質學	高木謙吉	四十六
三十	新法地質學	高木謙吉	四十七
三十一	新法地質學	高木謙吉	四十八
三十二	新法地質學	高木謙吉	四十九
三十三	新法地質學	高木謙吉	五十
三十四	新法地質學	高木謙吉	五十一
三十五	新法地質學	高木謙吉	五十二
三十六	新法地質學	高木謙吉	五十三
三十七	新法地質學	高木謙吉	五十四
三十八	新法地質學	高木謙吉	五十五
三十九	新法地質學	高木謙吉	五十六
四十	新法地質學	高木謙吉	五十七
四十一	新法地質學	高木謙吉	五十八
四十二	新法地質學	高木謙吉	五十九
四十三	新法地質學	高木謙吉	六十
四十四	新法地質學	高木謙吉	六十一
四十五	新法地質學	高木謙吉	六十二
四十六	新法地質學	高木謙吉	六十三
四十七	新法地質學	高木謙吉	六十四
四十八	新法地質學	高木謙吉	六十五
四十九	新法地質學	高木謙吉	六十六
五十	新法地質學	高木謙吉	六十七
五十一	新法地質學	高木謙吉	六十八
五十二	新法地質學	高木謙吉	六十九
五十三	新法地質學	高木謙吉	七十
五十四	新法地質學	高木謙吉	七十一
五十五	新法地質學	高木謙吉	七十二
五十六	新法地質學	高木謙吉	七十三
五十七	新法地質學	高木謙吉	七十四
五十八	新法地質學	高木謙吉	七十五
五十九	新法地質學	高木謙吉	七十六
六十	新法地質學	高木謙吉	七十七
六十一	新法地質學	高木謙吉	七十八
六十二	新法地質學	高木謙吉	七十九
六十三	新法地質學	高木謙吉	八十
六十四	新法地質學	高木謙吉	八十一
六十五	新法地質學	高木謙吉	八十二
六十六	新法地質學	高木謙吉	八十三
六十七	新法地質學	高木謙吉	八十四
六十八	新法地質學	高木謙吉	八十五
六十九	新法地質學	高木謙吉	八十六
七十	新法地質學	高木謙吉	八十七
七十一	新法地質學	高木謙吉	八十八
七十二	新法地質學	高木謙吉	八十九
七十三	新法地質學	高木謙吉	九十
七十四	新法地質學	高木謙吉	九十一
七十五	新法地質學	高木謙吉	九十二
七十六	新法地質學	高木謙吉	九十三
七十七	新法地質學	高木謙吉	九十四
七十八	新法地質學	高木謙吉	九十五
七十九	新法地質學	高木謙吉	九十六
八十	新法地質學	高木謙吉	九十七
八十一	新法地質學	高木謙吉	九十八
八十二	新法地質學	高木謙吉	九十九
八十三	新法地質學	高木謙吉	一百

科 全 書

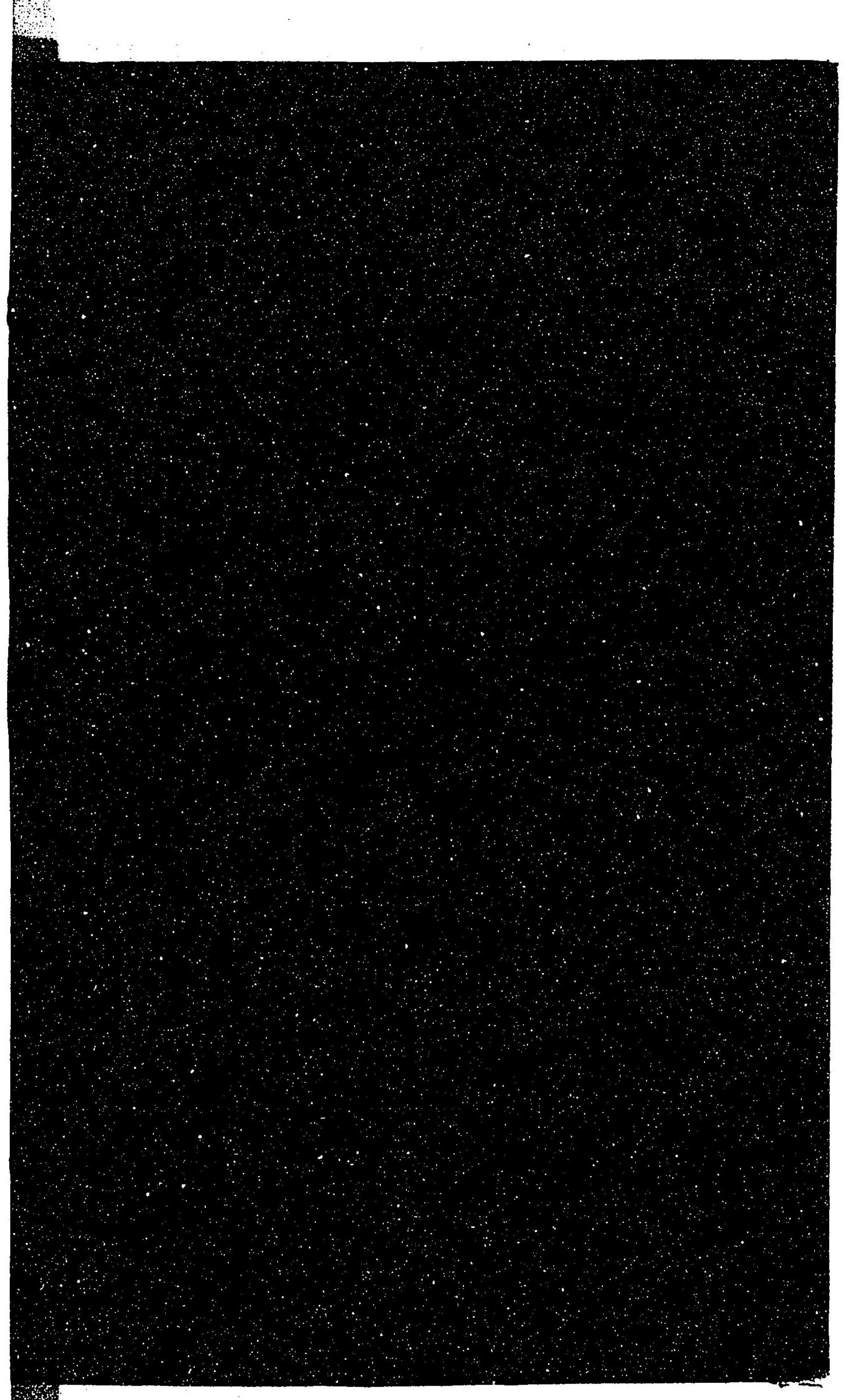
一	哲學	藤井文士	四十七
二	商工地理學	永井文士	四十八
三	提要造林學	本多林學士	四十九
四	商業經濟學	清水林學士	五十
五	氣候及土壤論	佐々木農學士	五十一
六	最新統計學	夏秋法學士	五十二
七	西洋新法學	吉國文法學士	五十三
八	分析化學	藤井理學士	五十四
九	民法債權編釋義	內藤理學士	五十五
十	稅關及倉庫編	岸尾法學士	五十六
十一	東洋教育史	中野文法學士	五十七
十二	西洋教育史	中野文法學士	五十八
十三	政治學	森山法學士	五十九
十四	政治學	森山法學士	六十
十五	政治學	森山法學士	六十一
十六	政治學	森山法學士	六十二
十七	政治學	森山法學士	六十三
十八	政治學	森山法學士	六十四
十九	政治學	森山法學士	六十五
二十	政治學	森山法學士	六十六
二十一	政治學	森山法學士	六十七
二十二	政治學	森山法學士	六十八
二十三	政治學	森山法學士	六十九
二十四	政治學	森山法學士	七十
二十五	政治學	森山法學士	七十一
二十六	政治學	森山法學士	七十二
二十七	政治學	森山法學士	七十三
二十八	政治學	森山法學士	七十四
二十九	政治學	森山法學士	七十五
三十	政治學	森山法學士	七十六
三十一	政治學	森山法學士	七十七
三十二	政治學	森山法學士	七十八
三十三	政治學	森山法學士	七十九
三十四	政治學	森山法學士	八十
三十五	政治學	森山法學士	八十一
三十六	政治學	森山法學士	八十二
三十七	政治學	森山法學士	八十三
三十八	政治學	森山法學士	八十四
三十九	政治學	森山法學士	八十五
四十	政治學	森山法學士	八十六
四十一	政治學	森山法學士	八十七
四十二	政治學	森山法學士	八十八
四十三	政治學	森山法學士	八十九
四十四	政治學	森山法學士	九十
四十五	政治學	森山法學士	九十一
四十六	政治學	森山法學士	九十二
四十七	政治學	森山法學士	九十三
四十八	政治學	森山法學士	九十四
四十九	政治學	森山法學士	九十五
五十	政治學	森山法學士	九十六
五十一	政治學	森山法學士	九十七
五十二	政治學	森山法學士	九十八
五十三	政治學	森山法學士	九十九
五十四	政治學	森山法學士	一百

每月貳 本 書
回發行 必 要

方今日進歩の運は専門學術の普及を促して已まざる、本書は乃ち此急需に應じて起りたる者にして、社會の指導を以て任する者、各種の術藝網羅して、郷土に在るの士と雖、亦本書に缺くべからざるのみならず、大蓋現今日日本人必須の寶典也。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

87
74





013619-000-6

87-74

宗教新論

加藤 玄智/著

M33

ABA-0088



